

ふくしま浜街道校

風景街道と復興地域づくり、そして次世代への継承

| 報 | 告 | 書 |



平成 28 年

12月9日(金)・10日(土)

9日 / 現地ワークショップ

10日 / 全体会・分科会

会場

いわき産業創造館

●福島県いわき市平字田町 120 番地 LATOV6 階



● 「ふくしま浜街道校」の会場となったいわき産業創造館



● 「ふくしま浜街道校」全体会・分科会開始前の受付の様子



● 現地視察で復興に向けた活動の説明を受けた



● 1日目の現地視察では、参加者も一緒に桜の植樹を行った



● 全体会では、まず石田東生氏による基調講演が行われた。風景街道の役割や可能性についての話に、参加者は熱心に聞き入った



● 2日目の午後は3つの分科会が行われ、それぞれのテーマに沿った話題提供のあと、熱い議論が交わされた

|目次|

全体概要 / プログラム	1
開会式 / 開校目的説明	3
基調講演	5
「風景街道地域づくりと強靱化・地方創正」	
開催地報告 その1	7
次世代の地域づくり・風景街道継承	
開催地活動事例報告 / 桑折宿まちなか街道の取り組み	
開催地活動事例報告 / 城下町あいづ道草街道の取り組み	
開催地報告 その2	13
震災復興と道の駅	
道の駅「よつくら港」	
道の駅「遠野」	
全体会総括	
第1分科会	17
風景街道活動による地域振興「新たな生活景の創出」	
第2分科会	19
風景街道活動を次世代に継承するために	
第3分科会	21
日本風景街道と「道の駅」の連携による地域振興策	
分科会総括	23
現地ワークショップ	25
風景街道大学による福島復興に向けて宣言	27
次回開催地市長挨拶	28
道路協力団体制度に関する説明会	

日程 / 平成 28 年 12 月 9 日 (金)・10 日 (土)

9 日 (金) / 現地ワークショップ 10 日 (土) / 全体会・分科会

会場 / いわき産業創造館 (福島県いわき市平字田町 120 番地 LATOV6 階)

主催 / 日本風景街道大学 ふくしま浜街道校 実行委員会

構成団体 / いわき市・広野町・NPO 法人ハッピーロードネット・NPO 法人日本風景街道コミュニティ・いわき観光まちづくりビューロー・広野町観光協会

後援 / 日本交通省東北地方整備局・観光庁・福島県・東北風景街道協議会・東日本高速道路株式会社・いわき商工会議所・いわき青年会議所・南双葉青年会議所・株式会社いわき市民コミュニティ放送・株式会社福島民報社・株式会社福島民友新聞社・株式会社いわき民報社・株式会社福島建設工業新聞社・NHK 福島放送局・東日本国際大学

12/10 (土) 全体会 (9:30 ~ 12:30)

●開会式 (9:30 ~ 9:50) ●開校目的説明

■基調講演

「風景街道・地域づくりと強靱化・地方創正」 (9:50 ~ 10:30)

◇講演者 / 石田 東生 (国立大学法人 筑波大学システム情報系 社会工学域教授)

■開催地報告その 1

次世代の地域づくり・風景街道継承 (10:30 ~ 10:50)

子供たちの発案による地域づくりの取り組み ならは PA、福島浜街道桜プロジェクト

◇報告者 / ハイスchoolサミット参加者 日置 友智 氏 (東北大学理工部研究科 物理専攻修士 1 年)

開催地活動事例報告

桑折宿まちなか街道の取り組み (10:50 ~ 11:10)

仙台藩伊達氏発祥の地として歴史的背景に基づく歴史的建造物等や街道を活かしたまちづくり

◇報告者 / 畠腹 桂子 氏 (奥州・羽州街道「桑折宿」まちなか街道 会長)

..... 休憩 (Intermission) (11:10 ~ 11:20)

城下町あいづ道草街道の取り組み (11:20 ~ 11:40)

会津範の居城「鶴ヶ城」を核として史跡・建造物を活かしたまちづくり

◇報告者 / 庄司 裕 氏 (城下町あいづ道草街道推進協議会・七日町通りまちなみ協議会事務局)

■開催地報告その 2

震災復興と道の駅

道の駅「よつくら港」 (11:40 ~ 12:00)

大震災時の道の駅の活動 (復興セール・イベント) 及び震災後、新たな地域の拠点として児童支援施設などの整備による地域の復興を支援

◇報告者 / 道の駅「よつくら港」運営 NPO 法人よつくらぶ理事長 伊藤 浩一 氏

道の駅「遠野」 (12:00 ~ 12:20)

大震災時の被災地後方支援基地としての役割と、震災後、沿岸地域への復興支援、また地域の観光振興に向けての拠点化

◇報告者 / 道の駅「遠野」前駅長 菊池 美之 氏 ((一社) 遠野ふるさと公社事務局長)

■全体会総括 (12:20 ~ 12:30)

◇総括者 / 石田 東生 (NPO 日本風景街道コミュニティ代表理事)

12/10 (土) 分科会 (13:20 ~ 16:10)

■第1分科会 (13:20 ~ 14:50)

風景街道活動による地域振興「新たな生活景の創出」

日本風景街道で着目されるのは、自然の中で営まれる暮らしの風景(生活景)。地域振興とは、地域の豊かな生活景を守り、創り、伝えること。日本風景街道活動による地域振興の「心」「技」「体」とは・・・。

◇座長/山内 秀彦 氏 (NPO 法人 地域づくりサポートネット 代表理事・コミュニティシンクタンク研究員)

■第2分科会 (13:20 ~ 14:50)

風景街道活動を次世代に継承するために

風景街道の活動もメンバーの固定化や高齢化などで、その「持続」という課題が顕在化。今後活動の存続に向けては、若年層の参加促進や後継者づくりが必要とされている。若年層の積極的な活動参加に成功している先進事例を紹介するとともに、如何に若年層の参加を促すかの議論を行う。

◇座長/紺野 裕乃 氏 ((一社) 北海道開発技術センター上席研究員・(一社) シーニックバイウェイ支援センター理事)

■第3分科会 (13:20 ~ 14:50)

日本風景街道と「道の駅」の連携による地域振興策

今後、地域固有の観光資源を活かし地域活性化を図るためには、風景街道活動による地域周遊の取り組み(ノウハウ)と、その情報発信拠点としての「道の駅」の連携が有効な手法として考えられる。積極的な連携を可能にするための課題とその克服を先行事例の紹介と、今後の連携のあり方について議論を行う。

◇座長/吉武 哲信 氏 (九州工業大学 教授 日本風景街道コミュニティ理事)

■分科会総括 (14:50 ~ 15:20)

●風景街道大学による福島復興に向けて宣言 (15:20 ~ 15:25)

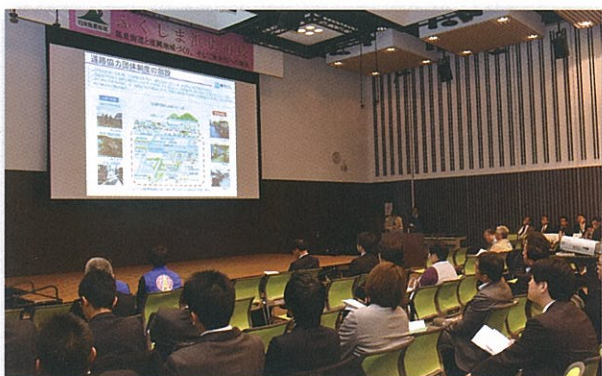
◇ぶくしま浜街道Happyロード NPO 法人Happyロードネット 代表理事 西本 由美子

●次回開催地市長挨拶 (15:25 ~ 15:30)

◇石川県珠州市 市長 泉谷 満寿裕 氏

●道路協力団体制度に関する説明会 (15:30 ~ 16:10)

◇国土交通省道路局 道路環境調査室 室長 高松 諭 氏



▲全体会



▲分科会

開会式

●司会
NPO法人
日本風景街道コミュニティ
理事 臼井 純子



開校目的説明



NPO法人
日本風景街道コミュニティ
代表理事 石田 東生

今日はいいい天候に恵まれ、風景街道の先行きを象徴しているようでありがたく思う。昨日もいにお天気の中、地元の皆さんの企画により、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故に見舞われた福島県の浜通り地方の現地を視察させていただいた。実際に被災地を訪れ、参加された皆さんの心の中には様々なことがインプットされたと思う。それを今日の議論の中でアウトプットさせてほしい。

全国各地からお集まりいただき、感謝申し上げます。それぞれの活動の中で、感じていること、考えていることなどを今日は忌憚なく話していただき、活発に議論を進めてほしい。それが、危機的な状況を抱えている日本を草の根から変えていく道筋となると信じている。

さらに、昨日と今日の体験と、議論したことを各地に持ち帰り、全国津々浦々に広げてほしい。そこに、日本風景街道大学を毎年、全国で開催している意義と意味がある。

◆歓迎あいさつ



いわき市長
清水 敏男 氏

皆様、アロハ！ ようこそ、フラガールが生まれたまちへ。地元市長として歓迎を申し上げます。全国各地に街道がたくさんあるが、ここには主な道として陸前浜街道と呼ばれる国道6号、常磐自動車道がある。かつて、このエリアは炭鉱で栄えたが、エネルギー革命に伴い閉山した。その危機を救ったのがフラガールだった。そして、東日本大震災のときもフラガールが立ち上がり、全国キャラバンを行って復興のシンボルとなった。

今、いわき市には双葉郡から原発周辺の皆さんが2万4,000人ほど移り住んでいる。被災地でありながら、被災者の方々を助けるという複雑な状況にあるが、同じ福島県民、道でつながった浜通りの仲間として、ともに頑張ろうと復興に向けて一丸となっている。浜街道はまだまだ厳しい状況だが、2020年の東京オリンピックの聖火ランナーのコースにしてほしいということを要望している。復興五輪の名にふさわしく、ここを聖火ランナーが走れば、浜街道もまた輝き出すのではないかと思う。今日が有意義な日となることを心から祈り、歓迎のあいさつとしたい。



広野町長
遠藤 智 氏

日本風景街道大学ふくしま浜街道校の開校にあたり、双葉郡より一言ごあいさつを申し上げたい。師走の折、全国からお集まりいただいたことに、被災地から御礼を申し上げます。当地は地震と津波、原子力災害の三重の困難に直面した。当時17万人が避難を余儀なくされ、今なお8万4,000人が、いわき市をはじめ全国の方々にお世話になっている。双葉郡を代表し重ねて感謝と御礼を申し上げます。

日本風景街道は、郷土愛を育み、日本列島の歴史、伝統、文化をつないで、国土の文化の再興の一助をなすことを理念・目的とされており、今日こうしていわき市においてふくしま浜街道校を開校できることに敬意と感謝を申し上げます。

昨日は、いわき市沿岸部から双葉地方南部の沿岸部を視察され、その後の交流会を経て、今日は石田先生の基調講演をいただきながら、震災後の道の駅の役割など、様々なセッションを通して有意義な取り組みがなされる。我々は皆

様とともに、被災地から復興に向けて、そして私たちが願う日本国土の美しい自然風土を培っていきたい。

これからの新たな出発に向けて、今日の開校を心に刻み、皆様とともに発展、隆盛してきたい。

◆来賓あいさつ



国土交通省環境安全課長
森山 誠二氏

本日は日本風景街道大学ふくしま浜街道校の開校、おめでとうございます。今日の開校にあたりご尽力いただいた、地元のハッピーロードネットの西本さん、筑波大学の方々に感謝申し上げます。

このたびの国会で、私どもにとってうれしい法律が2つできた。1つは無電柱化推進法、もう1つは自転車利用促進法。これらはそれぞれ議員立法で、電柱を地中化して風景を良くしよう、自転車の利用促進を盛り上げていこうというもの。この2つは風景街道にとっても役に立つ法律だと思っている。

また、今年2月の法律改正で、道路協力団体制度ができた。各地区で活動されている方々を協力団体として位置づけ、道路行政、道路管理に貢献してもらおうというもの。今までは不安定な形で街道の整備や、管理をやられていたが、これからは協力団体になっていただくことで、みずからの手で道路を管理していただき、みずから稼いでいくことも期待できる。

そういった意味で、日本風景街道、平成18年に当時の谷口局長の指導による発足から10年が経過し、いよいよ本格的に動けるツールができた。日本風景街道大学の活動を通じて、各地区でどういった活動をされているかを知り、互いに切磋琢磨できる。そういう意味で、今日のふくしま浜街道校が大いに盛り上がることを祈念して、お祝いのあいさつとしたい。



福島県知事 内堀 雅雄氏(代理)
福島県土木部長
大河原 聡氏

日本風景街道大学ふくしま浜街道校が全国から多くの方々をお迎えし、福島県で開催されること、福島県民を代表し心から歓迎を申し上げます。また、開催にあたりご尽力いただいた実行委員会の皆様、関係各位に厚く御礼申し上げます。

東日本大震災から明日で5年9カ月になる。この間、国内外からの温かいご支援と県民のたゆまぬ努力により、復旧・復興事業の着実な進展や、県内観光地の賑わい回復など、復興に向けた明るい光が強まりを見せてきた。これもひとえに国土交通省をはじめ関係各位や全国の皆様のご支援の賜物であり、この場を借りて深く感謝申し上げます。

現在、福島県内には、日本風景街道として、「ふくしま浜街道ハッピーロード」、「桑折宿まちなか街道」、「城下町あいづ道草街道」の3つのルートが登録されているが、さらに磐梯吾妻スカイライン、レイクライン、ゴールドラインを1つのルートとして新たに申請がなされていると伺っている。本県の観光振興や交流の拡大、地域創生など復興への大きなはずみになると期待している。

本日は様々な活動の発表や意見交換を通じて風景街道の地域への貢献と、復興に向けた福島への理解を深めていただくとともに、引き続き本県の道路行政に一層のご理解、ご強力をお願いしたい。日本風景街道大学ふくしま浜街道校の成功とご参会の皆様のご健勝とご活躍を祈ってお祝いの言葉とする。

基調講演

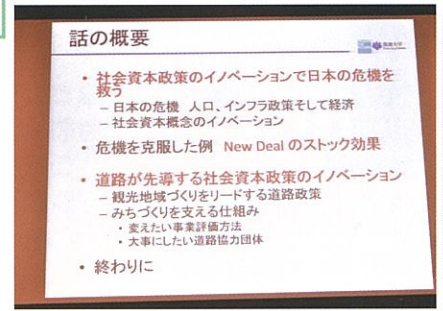
「風景街道・地域づくりと強靱化・地方創生」



■ 講演者

NPO法人 日本風景街道コミュニティ 代表理事
国立大学法人 筑波大学 システム情報系 社会工学域教授

石田 東生



この地で風景街道大学をやることの意味

震災と原発事故、二重の意味での被災地にみんなが集まり、復興、地方創生と道路のあり方、風景街道のあり方を根底から考えること。そのことを持ち帰ってさらに日本を良くしていくことに、今回、この地で風景街道大学を開校する意味がある。

今回のテーマは地域や風景づくりの次世代への継承、震災復興と強靱化、風景街道と道の駅の連携、協働、貢献について話したい。

日本の危機～人口・インフラ政策・経済について～

人口減少にある日本。出生と移動が人口増減にどのように影響するかをみると、まず、移動率が高いと人口増減率も高いことがデータから読み取れる。移動率がマイナスだと増減率も下がる、という関係性がある。

一方、合計特殊出生率と同様の婦人子ども比でみる。婦人子ども比とは、15歳から39歳までの女性の数に対する0歳から4歳の子どもの数を示したものだ。データからわかるのは、出生は自治体の人口増減を決めていないということ。たくさん子どもを産んでくれているところは日本全体に対しては貢献しているが、それが地方自治体には反映されていない。

婦人子ども比の高い自治体とはどういうところかということ、離島や山村など条件的に不利な自治体が毎年、半分程度を占めている。婦人子ども比と自治体の規模の関係を見ると、規模が小さい自治体ほど婦人子ども比が高いことがわかる。

それに対して、婦人子ども比が低いのは首都圏に近い関東地方である。このことから、これからは、日本全体に貢献している婦人子ども比の高い自治体にどう元気になってもらうかということが大事だと言える。

今こそ、地域への逆転とインフラ政策の変更を

そういうことに、社会資本政策はどういう形で貢献できるのかという視点を持つことも必要である。日本を含む先進6各国、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアの最大都市圏が総人口に占める割合が、どんなふうに変化してきたかを見ると、東京だけが増加し一極集中している。これは近未来に都市圏に大地震があるとされている日本にとっても危ういこと。日本の危機を考えると、地域への逆転の時が今だ。

政府も国土強靱化、地方創生、観光立国を打ち出しているが、支える資本政策のインパクトがなく、連携がとれていない。社会資本形成の公共投資について、主要先進国の国際比較を見ると、日本の過少投資が顕著である。カナダ、イギリス、アメリカの社会資本への公共投資は高い。グローバル時代の競争にさらされる中で、各国ではインフラ投資がなされている。それは、地域を魅力的にする、生産性を上げる、観光資源を豊かにしコミュニティを元気にすることをしていかないと、国が成り立っていかないためだ。ところが、日本だけが過少投資になっている。インフラ政策の変更が今こそ必要である。



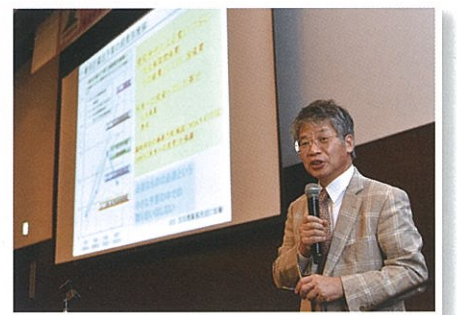
未来への投資を怠っている国に未来はない

では、日本ではどこに予算が使われているかというと、年金、福祉などの社会保障関係費。これも大事だが、地方交付税、国債費がふえている一方で、公共事業費、文教・科学技術振興費が減っている。公共事業と教育費は未来への投資。これを怠っている国に未来はない。

インフラ政策の構造的な過少投資で、インフラが細り、国際競争力が劣化する。今こそ逆転の時。その先頭を走るべきなのが社会資本政策、道路政策である。

ニューディールのストック効果

イノベーションを切り拓くということで、ニューディールの例をもう一度考えてみたい。ルーズベルト大統領はケインズ政策で知られているが、そのフロー効果はいわれられてもストック効果はあまり知られていない。



例えば、ニューディールのTVA (Tennessee Valley Authority)。テネシー川の総合開発が有名である。1933年にルーズベルトが署名をしてTVA法ができた。このときにつくられたフーパーダムは、ロサンゼルスやラスベガスに水を供給し、今でも観光スポットになっている。ダムの発電機能は現在も活躍していて、最近の総発電量は1,580億KWH。これは関西電力よりも大きく、巨大なストック効果となっている。補助金なしで立派に運営している。

また、ダムだけではなく、道路も65万マイル、今の日本で120万キロくらいなので、それ以上のものをつくっている。どういう道路をつくったかという、例えばBlue Ridge Parkwayは、全長800キロ、東海岸の国立公園の中を走っている道路。国立公園で土地利用が厳しく規制されており、沿線には何もなく、混雑もない。だから日本のB/Cはゼロだが、ドライブするのに非常に気分がいい道路になっている。このミュージアムに、1932年当時の州知事の言葉が残されていた。「美しい景色はバージニアの次の大きな収入源になるだろう」と。その言葉どおり、このBlue Ridge Parkwayは現在、年間2,000万人が訪れる大観光地になっており、2,000億円をはるかに超える観光収入をもたらしている。80年前につくられた道路が現在の観光収入を支える、まさにストック効果といえる。

ニューディールで道路づくりを担ったのが、CCC(Civilian Conservation Corps)。市民保全部隊とも呼ばれている。1933年にできて、第2次世界大戦が始まった1942年で活動を終了した。当時500万人ぐらいたった若年労働者に教育や職業訓練をし、彼等が道路の建設に活躍した。つまり、人材というストック効果もあったということ。このパークウェイがシーニックバイウェイに育っている。我々はこういうところから学びたい。



道路が先導するイノベーション

国も今、観光を基幹産業にしようとしている。特にインバウンド対応を意識している。2004年の小泉政権のときにこのような動きが始まった。観光立国推進戦略会議があり、その基本方針が「住んでよし、訪れてよしの国づくり」。

今、風景に映りこむ街や地域の活気、人々の生活、元気、誇りといったものが危機を迎えている。風景そのものよりも、そこに映りこむ地域そのものが衰え、風景を見るに耐えないものになっているということが大きな課題。そこに日本風景街道の根本的な精神がある。その課題の解決に向けて、みちの持つ人・地域・モノ・コトを結び力を活用して、地域資源の再発見と磨き上げを行い、「住んでよし、訪れてよし」の地域づくりをコミュニティ主導で実践するのがシーニックバイウェイ（風景街道）だ。

宗谷シーニックバイウェイの例でいうと、代表者会議には様々な人が関わっている。これは観光庁が進める日本版DMOの要素をことごとく持っていて、しかも実践している。観光地域の道路政策も観光庁の先をはるかに進んでいる。イノベーションをリードしてきたと言っていい。

しかし問題もあり、例えば昨日視察させていただいた国道6号もそうだが、歩道がほとんどない。これではサイクリングも楽しめない。自動車専用道路のようにになっている道を、何とか、移動が楽しい道、自転車が走って楽しい道にしてほしいがなかなかできない。評価方法を抜本的に変えないと、質的な改良ができない仕組みになっている。

風景街道と道の駅の関係

そういう中で大事にしたいのが道の駅。最初の道の駅はプレハブとテントで始まった。それが成長した結果、道の駅の認知は国民的レベルになった。地域経営戦略に位置づけられたり、経済効果も大きい。何より大きいのは、道の駅に携わる人たちの気持ちが大きく変わった、自信が出てきた、明るくなったということ。

これから日本の地方はいろいろな課題がある。道の駅という拠点を好転させ、さらに線から面に広げていただきたい。その中で、課題もあると思うが、そういうときに道の駅で得たやる気や自信、明るさが役立つだろうと強く思っている。風景街道と道の駅が支え合っていくことをやりたい。



道づくりを支える仕組み

道路事業は国、地方自治体の予算でやるので、決めるのは政治だが、B/Cに過度にとられることなく、必要性の主張とストック効果を訴えていくことが重要である。大事なことは効率性の評価だけではなく、公平性と安全保障、国防だけでなく、歴史、文化、伝統、愛着、誇りの安全保障を問いたい。次世代にどうつながっていくかが大切である。

この度、道路協力団体制度が創設された。これは画期的な制度で、道路管理者がやっていた管理を、住民、市民と一緒にやることが可能になった。この制度を大事に育てたい。

イノベーションは技術革新だけではなく、社会・経済の新結合。その先頭をいくのが風景街道であり、道の駅である。日本のために、風景街道が担う役割は大きく、自信を持って皆さんとともに前に進みたい。その一助として、日本風景街道大学が議論の場になっていくことを願っている。



開催地報告その1-①

次世代の地域づくり・風景街道継承

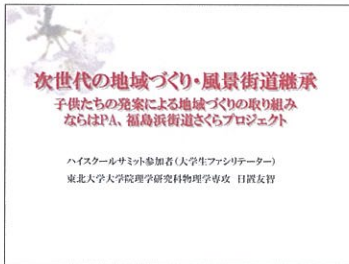
子供たちの発案による地域づくりの取り組み
ならばPA、ふくしま浜街道桜プロジェクト



■ 報告者

ハイスchoolサミット参加者
東北大学理工学部研究科 物理専攻修工1年

日置 友智 氏



■ 地域づくりへの高校生や大学生の関わり

今回は、国道6号線を軸としたまちづくりの取り組みと、その活動に高校生や大学生がどのように関わってきたかについて話をしたい。はじめに、ふくしま浜街道として風景街道に登録されているこの浜通り地域は、江戸時代以前から、太平洋側の交通の要所として発展してきた。特に江戸時代には、水戸藩から仙台藩までの街道を浜街道として整備したという歴史がある。いわき、広野、相馬などを結んだ地域として、水戸、仙台という大きな藩にはさまれながらも、固有の文化を発展させてきた地域である。

このような地域にあり、風景街道に登録されているのが「ふくしま浜街道ハッピーロード」である。平成19年に風景街道に登録されており、非常に風光明媚な街道となっている。例えば、かつての江戸浜街道の面影が残る松並木や、日の出の美しさで有名な波立海岸、また、国道6号線沿いに広がる太平洋の景色が美しい。

しかしながら、このふくしま浜街道ハッピーロードをより魅力的にしているのは、むしろ様々な地域ぐるみの活動である。その代表的な例として3つ紹介したい。1つは「みんなでやっぺ！ きれいな6国」と題して、国道6号線沿いで高校生や一般のボランティアによって行われる一斉清掃活動。2つめは今年で第2回を迎えた「ハイスchool世界サミット」。これは「ハイスchoolサミット in 東北」という形で7年間、さらにその前のワークショップも含めると長い間、継続して行っている活動。このハイスchoolサミットから生まれたアイデアがどんどん実現しているという実績もある。3つめが「ふくしま浜街道 桜プロジェクト」。これは以前からあった構想をもとに震災以降に本格的に始動し、様々なボランティア団体を巻き込んだ大きな活動となっている。

この3つの活動で強調したいのは、これらが全て高校生のアイデアから生まれてきていることだ。まず、ふくしま浜街道ハッピーロードネットの取り組みを時系列で説明したい。

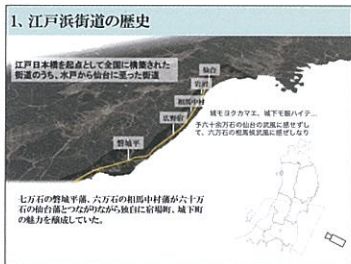
ふくしま浜街道ハッピーロードネットの活動の発端は、平成18年1月の「こどもと一緒に未来のまちを考えるフォーラム in 相馬」。これも高校生の発案で始まっている。地元が大好きだが地元で仕事がなく、地元を出なければならない。何とかして自分たちのふるさとを魅力あるまちにしたいという高校生の声があり、どうすれば魅力あるまちになるか、それを若者から聞こうということが始まった。

第1回のフォーラムから「みんなでやっぺ！ きれいな6国」という活動が実現している。重要なことは、高校生がここで発案したことをただ聞いて終わりにするのではなく、面白いと思う活動を実行し、継続していくこと。これがハッピーロードネットのすごいところだと思う。

その翌年に富岡町で開催された2回目のフォーラムでは、常磐自動車道ならばパーキングエリアに高校生のアイデアを導入することが提案されている。サービスエリアで地元を盛り上げるというコンセプトがここから生まれ、高校生の発案から、サッカー日本代表の手形、足形を設置することや、パーキングエリアのデザインを考える検討会がこの後行われた。

この勢いでハッピーロードネットの活動は発展していき、平成22年には、第6回を迎えた「みんなでやっぺ！ きれいな6国」は、参加人数が2,200人という大きな活動となった。さらに、ならばパーキングでの高校生を交えた懇談会では、実際に日本代表の手形、足形をとってレリーフをつくる段階まで準備が進んだ。

また、「まちづくりフォーラム」は、「ハイスchoolサミット in 東北」という形になり、仙台で初めて開催された。参加高校生は約150名となり、地域情報の発信や課題などが議論された。このとき高校生だった私も初めて参加し、ここからハッピーロードネットとの関わりが始まった。





東日本大震災による中断とさらなる発展

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、福島県沿岸部の浜通り地域は甚大な被害を受ける。さらに福島第一原子力発電所の事故により、国道6号線が分断されてしまい、中断を余儀なくされた活動もある。「みんなでやっぺ! きれいな6国」は、空間線量の問題があり中止となったが、平成27年には再開している。

一方で、このピンチをチャンスに変えたこともあった。「ハイスクールサミット in 東北」では、これまでのまちづくり、みちづくりというテーマに加えて、震災や原発事故を語りたいという高校生の意図を反映し、「震災復興」という軸を入れることで、さらに盛り上がったワークショップを行うことができた。当時、高校生だった私にとって印象的だったのは、宮城県及び福島県の沿岸地域の高校生が、地元の復興のために何かしたいという思いが強かったこと。実際に私の高校でも、震災復興委員会という特別委員会を生徒会で立ち上げ、ボランティア活動を行った。この高校生の行動力はもともとあったものだと思っている。日常生活の中で埋もれていたが、震災という特別な状況になったとき、自分たちが地元で貢献できるという意思が表れたのだと思う。

この勢いでハイスクールサミットはさらに発展していく。震災後に開催された「ハイスクールサミット in 東北」の議論の結果は、提言書にまとめて、野田前首相及び前田元国土交通大臣を表敬訪問し、報告することができた。ここでハッピーロードネットが果たした重要な役割として強調したいのは、行政との間を取り持ってくれたこと。この活動が高校生にもたらす意味は、責任がある大人が耳を傾けてくれることへの感動である。たかが素人であり高校生である若者が考えたことなど大人は真剣に聞いてはくれないだろうという思いが高校生にはあった。しかし、本当に自分たちの意見を聞いてくれる場があることがわかると、高校生のやる気が俄然変わってくる。そういういい循環ができていたと思う。

もう1つ言いたいことは、高校生の関与の仕方の多様化。ワークショップに参加して意見を言って終わりではなく、ワークショップに参加して、自分で文章をまとめ、これを大人に伝えたいという思いが湧き、実際に大人に伝える。これは高校生にとっていい刺激になる。私自身、大人に向けてどのように話せばいいのかわかる、ということがとても勉強になった。

未来を見据えた新たなプロジェクト

ハッピーロードネットが新たに取り組んでいるのが「ふくしま浜街道 桜プロジェクト」だ。このプロジェクトのメッセージは、一度分断されてしまった国道6号を桜の道としてまた繋ぎ直そうということだ。分断と避難でバラバラになってしまった人たちが、またここに戻って来れるような地域にしたい、という意図が反映されている。ここでも、参加の型式を多様化させ、できるだけ多くの人を魅力づくりに巻き込む工夫がされている。例えば、オーナーシップ制度や、ボランティアで植樹をするなど。多くの人に参加することが風景づくりに重要ではないかと考えている。既存の風景を魅力的にすることに加え、もっと面白い風景を自分たちで新しくつくっていく。そのプロセスが地域の文化を醸成していく。そういったメッセージ性をこのプロジェクトは持っていると思っている。

そして、ハッピーロードネットはさらに新たなステージに立とうとしている。それが「道の駅ひろのプロジェクト」だ。全国に広がったハイスクールサミットの卒業生が一堂に会して、大学生が道の駅をデザインしてみようというもの。これはかなりシリアスなもので、実際に約1年かけて専門的なことも交えた様々な議論をしながら、大学生が道の駅の基本構想を作成した。その中で、復興を中心として生活、交流、エネルギー、発見、防災の5つの要素を取り入れ、地域住民が集まり、防災を学べる場としての道の駅をデザインした。この実現を目指し現在も活動している。

実際に学生が地域づくりに取り組む魅力やメリットはどこにあるのか。学生の声を集めてみた結果、地域づくりが総合力を要するところに魅力があるのではないかと考えるに至った。専門性を要することや、アイデアを生み出す過程での様々な人との議論、地域の人たちとのコミュニケーションなど、若者にとっては非常に教育的効果が高いと考えている。

美しいふるさとや風景の継承というのは、これまで存在していたものを引き継いだり、その魅力を新たに発見することにとどまらないと思う。継承という言葉には次世代が含まれている。その次世代がどうしたいかが重要。若者は決して現状に満足することはない。今あるものを生かし、保全してこうというだけでは若者は食いつかない。新しい風の勢いと、もともとある土地の良さ、地域の魅力、地方の土壌の強さなどをどうやって接続して、新しい風を取り込んだ地域づくりをしていくかが問われる。



開催地報告その1-②

開催地活動事例報告 桑折宿まちなか街道の取り組み

仙台藩伊達氏発祥の地として歴史的背景に基づく歴史的建造物等や街道を活かしたまちづくり



■ 報告者

奥州・羽州街道「桑折宿」まちなか街道 会長

畠腹 桂子 氏



桑折宿まちなか街道
街道交流から発展した防災協定

奥州・羽州街道「桑折宿」
パートナーシップ代表
畠腹 桂子

■ 街道を通じた地域づくりと防災協定

桑折宿まちなか街道の活動の拠点、桑折御蔵という古い蔵を活かしたところ。ここで女性ボランティアを中心に活動している。

これまで、広域的なホテル連携交流や、雞めぐりなどを開催し、ルートの魅力を高めながら、住んでよし、訪れてよしの桑折町、元気な桑折町、美しい桑折町、楽しい桑折町を目指して活動している。

特に、街道交流から発展した防災協定を特筆したい。民間レベルでいろいろな交流事業を、街道を通してやっていたことに端を発し、行政も関わる防災協定を結ぶことができた。街道でつながる山形県上市市とは、災害時相互応援協定を締結した。羽州街道サミットなどを通じて交流を続けていたのが実を結んだ形となった。

この街道のもつ歴史的な意義である、物的・経済的交流、宗教的・精神的な交流、人的な交流に、さらに私たちの事業である魅力ある地域づくり交流が加わった。このことが「防災」という観点からの相互交流にまで発展したことは、私たちも嬉しく思っている。行政と住民のパートナーシップにより、安全・安心のための財産ができたことは、これからの桑折町の強い絆、そして宝となっていくと思っている。

桑折宿まちなか街道 ルート概要

・福道温泉・福島県及び街道4004号などを含む総延長約50kmのルート
・半田廻山跡、旧伊達郡役所、追分、寺社群、蔵の町並みなど歴史的な資産を活用した魅力と活力のある地域づくりを目的に、街道を活かした「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりを推進

■ 献上桃の郷、追分もある桑折町

桑折町は人口約1万2,000人余りの合併しない小さな町。自然と歴史と文化のふるさとを標榜(ひょうぼう)している。福島県中通りにあり、県都である福島市から北へ12キロ、宮城県境にある町だ。太鼓の昔、町の東側を流れる阿武隈川の氾濫が肥沃(ひよく)な土地をもたらし、現在は献上桃の郷として、平成6年から23年連続で皇室に桃を献上している。日本三大銀山と称された半田山を背景に、桃の花、菜の花が咲く風景は、まさに桃源郷そのものである。旧伊達郡役所や、追分、寺社群、蔵の町並みなど、歴史的な資産もある町だ。



奥州街道と羽州街道が分岐する桑折町は、参勤交代の諸大名が多く通過した。また、生糸や煙草など物資の輸送も盛んに行われた物流の拠点としても栄えた。

「住んでよし、訪れてよしの桑折町の創造をめざして」をコンセプトに、「歩いて楽しめる地域づくり懇談会」を立ち上げた。これにはたくさんの町民が関わっている。その先駆けとして行ったのが、奥州街道・羽州街道追分の復元。古絵図などをもとに、県と町の事業として、道標、枝垂れ柳、御休憩所などを復元した。これにより、人や物で賑わいを見せた当時の追分を偲(しの)ぶことができるようになった。

奥州街道・羽州街道追分の復元

・奥州街道と羽州街道が分岐する桑折町は、参勤交代の諸大名が多く通過し、また、生糸や煙草など物資の輸送も盛んであり、物流の拠点となる重要な地であった。
・現在の分岐点は、地元の方々を中心となり、古絵図等を基に町と町の事業にて道標、枝垂れ柳、御休憩所等を復元し、人や物の往来で賑わった「追分」を偲ぶことができるようになった。

■ 活動の拠点となっている「桑折御蔵」

私たちの活動の拠点となっている「桑折御蔵」は、町の中心地に位置している。築130年になる店蔵で、町が借り受けて改装し、「元気こおり本舗有限会社事業組合」を設立して運営に当たっている。歴史ある建物を壊さず活用しようと行政に働きかけたのがきっかけ。活動を開始して10年になる。女性団体連絡協議会を立ち上げて20年になるが、その中の10年をかけて、女性の視点で地域づくりを行ってきた。

東日本大震災のときには半壊になってしまったが、再開することができた。会員が無償ボランティアで運営に当たり、現在は、月・火・水曜日をお休みとし、木・金・土・日曜日に開館している。

「桑折御蔵」では、おもてなし、観光案内、アンテナショップの3つの機能を掲げている。ここを訪れ、休んでいく人を見るとうれしい気持ちになる。人が歩けば、車が通れば、休むということはセットになっていると思う。だから休憩スペースとしてのおもてなし、観光の役目を担っている桑折御蔵に誇りを持っている。

さらに、カフェ図書「まゆたま」がある。東北大学の学生さんの提案による、ミニ図書館を併設したカフェ。空き店舗を利用して開設した。学生さんと町民が協力しあって運営委員会を

「桑折御蔵」・カフェ図書「まゆたま」の運営

・町の中心地にある店蔵を町が借り受け改装し、「元気こおり本舗有限責任事業組合」を設立し「桑折御蔵」として運営。
・会員の無償ボランティアで運営しており、町の観光案内やおもてなしの場として活用されている。
・東北大学の学生によるミニ図書館併設した商店街活性化施設として、空き店舗を改装したカフェ「図書まゆたま」を開設。
・学生と町民からなる運営委員会にて活動を進め、町民の思いの場となっている。

推奨土木遺産「西根堰」を活用したウォーキング事業

- 農業用水となっている「西根堰」が平成22年度(土木学会推奨土木遺産)となった。
- 福島市飯坂町から桑折町まで松尾芭蕉が歩いた奥の細道となっており、奥の細道・推奨土木遺産として「西根堰」という歴史資源を活かした、毎年開催されるウォーキング事業を推進。
- 土地改良区等の協力によりウォーキング事業を実施し、県内外から多数の参加者。



▲西根堰
江戸時代後期に作られた農業用水路で2019年に土木学会に選定され、土木遺産となっている。

▲ウォーキングで西根堰地域の自然を体感

復興祈願「竹灯籠まつり」

- 地元中学校吹奏楽部の演奏や交流のある上山市から参加した合唱団が歌声を披露。また、桑折町に避難している浪江町の相馬流れ山踊り保存会が踊りを披露。
- 福島県を印象した竹灯籠の中に子どもが描いた「いのり」の文字を描き、復興への願いを竹灯籠に託した。夕間に飾る伝統的な竹灯籠の灯りは、訪れた人々を魅了した。



▲いのりの文字を描く子どもたち

▲中学校吹奏楽部による演奏

▲桑折町から参加の合唱団

▲福島県を印象した竹灯籠の灯り

▲浪江町による相馬流れ山踊り

地域経済の復興を進める活動1

桑折産の農産物や商品の安全・安心をPRし風評被害の払拭と地域経済の復興を進める活動

- 桑折町に避難している浪江町民と一緒に地元食材で料理コンテストを開催
- 「わが家のおもてなし」



▲「わが家のおもてなし」

地域経済の復興を進める活動2

桑折産の農産物や商品の安全・安心をPRし風評被害の払拭と地域経済の復興を進める活動

- 桑折町の米と水を使用し、福島県内で醸造した日本酒を復活。愛好家による人気投票で3年連続1位。
- 「献上桃の郷」による交流



▲大分県中津市にて

地域経済の復興を進める活動3

桑折産の農産物や商品の安全・安心をPRし風評被害の払拭と地域経済の復興を進める活動

- 地域商品ブランド化 献上桃の郷から産まれた桃ふく



▲桃ふく

つくり、ここで飲物やスイーツを提供したり、映画を上映したりしている。現在、この「まゆたま」は、開館から5年ということで、学生さんはお休みしているが、ここが閉まっていたのは寂しいので、機会あるごとに私たちが開けて、活動している。

■歴史的資源を活かした着地型観光・広域観光連携

また、農業用水の「西根堰」が、平成22年に土木学会推奨土木遺産となった。これを機に、町の体育協会の主催で、ウォーキング事業を行い、各地からの参加があった。「西根堰」は、江戸時代につくられた農業用水で、福島市の奥座敷である飯坂町から、伊達市、国見町、桑折町の2市2町を流れている。飯坂町から桑折町までは松尾芭蕉が歩いた奥の細道となっており、「西根堰」という歴史的資源を活かした着地型観光・広域観光連携を進めている。

また、今回で19回目を迎えた『雞めぐり』は、奥州・羽州街道沿いを中心に商店のショーウィンドウや店内にひな人形を飾り、歩いて楽しめるまちづくりの事業として展開した。桑折町の仮設住宅などに避難している浪江町の女性たちも参加し、飛騨高山の「さるぼぼ」をはじめ、野菜や果物などをかたどった吊し雞を1万個つくり、街中の軒先に飾った。雞飾りは2月の末から3月初めの寒い時期だが、冬の街道から春を待ち望むとともに、子どもたちの健やかな成長を願う気持ちを共有しながら、多くの方に見ていただいた。



復興祈願の竹灯籠まつりは2回行っている。平成23年10月15日に開催したときは、復興を願い、小学生が「いのり」という文字を描いた。地元の中学生の吹奏楽部による演奏や、桑折町と交流のある上山市からは男性たちの合唱団が参加し、歌声を披露してくれた。また、桑折町に避難している浪江町の人たちが、自分たちの地元につながる相馬流れ山踊りを披露してくれ、参加者全員で復興を祈った。

町を流れる産ヶ沢川は、ゲンジボタルが生息する場所で、初夏には多くの来町者がホタル鑑賞に訪れる。このことから、「ホタルによる3県3町交流」の事業を行っている。宮城県のとて宿町、山形県の高島町、そして福島県の桑折町で、いずれもホタルの名所といわれているところ。標高の違いで、ホタルを鑑賞できる時期がずれることから、3町を訪れることで1カ月程度の長い期間、鑑賞を楽しむことができる。

子どもたちによる生息保護活動も行っており、ホタルの幼虫を放流したり、きれいな川の維持にも取り組んでいる。

■地元農産物や商品の安全・安心をPR

私たちは、地域経済の復興を進める活動も行っている。まず、風評被害を払拭し、桑折町の農産物や商品の安全・安心をPRしている。その活動の1つが、「わが家のおもてなし 人気手料理コンテスト」。漬物の部、ごはんの部、おかずの部の3部門で、自慢の料理を持ち寄ってもらった。好評だったものは商品化して販売している。桑折御蔵は行政からの補助金などはもらっていないので、このような事業で運営している。

私たち女性の活動に触発されてか、男性も立ち上がり、活動を始めた。それが、桑折町の水と米で仕込んだ日本酒の復活。愛好家による人気投票で3年連続1位を獲得している自慢の逸品だ。

また、私たちは「献上桃」を持って、大分県中津市まで行った。大分県中津市は福沢諭吉生誕の地。そこから、私たちがつくった1万個のさるぼぼとお雞様を貸してくださいとの依頼を受けた。これをきっかけにして、中津市との交流が始まった。中津市では献上桃の販売を行い、おかげさまで完売することができた。

■地域商品のブランド化

これからの復興を進める活動の中で、私たちは地域商品のブランド化をめざす事業も行っている。献上桃の郷であることを活かして、「桃ふく」という商品をつくった。桃のコンポートと生クリームが入った大福で、これを桑折町の特産品に加えたいと考えている。

平成19年5月27日にオープンした桑折御蔵は、活動開始から10年を迎えた。そこで、関係者による感謝の集いを平成28年12月3日に開催した。10年の節目を迎えて、気持ちを新たにしたい。

今後の取り組みとして、やはり、未来の地域づくりの担い手は子どもであるということから、子どもたちにふるさとの歴史や文化を伝えようということで、子どもたちも案内する街なか探索ツアーを開催する予定としている。今後も元気よく、魅力ある桑折町をめざしたい。



開催地報告その1-③

開催地活動事例報告 城下町あいづ道草街道の取り組み

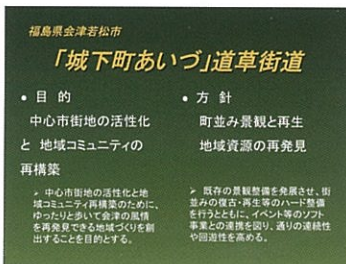
会津範の居城「鶴ヶ城」を核として史跡・建造物を活かしたまちづくり



■ 報告者

城下町あいづ道草街道推進協議会・
七日町通りまちなみ協議会事務局

庄司 裕 氏



■ 中心市街地の活性化と地域コミュニティの再構築

「城下町あいづ道草街道」は、中心市街地の活性化と地域コミュニティの再構築ということを目指して始まった。方針としては、商店街の町並み景観と再生、地域資源の再発見ということで取り組んでいる。特にその中でも、七日町通りと、いにしえ夢街道について紹介したいと思う。城下町である会津若松は、鶴ヶ城を中心に町が形成されてきた歴史を持つ。会津若松駅は城の北の方にあり、駅からお城に近づくにつれて町の中心部となっていく。

七日町通りは、城下町の中心から少し西の方にある通りである。駅から南に向かって大町通り、野口英世青春通りがある。野口英世青春通りは、2歳の時にいりりて手にやけどを負った野口英世が、その手の手術をした病院で、青年時代に3年間医学の勉強をした会陽医院がその通りにあったということから名づけられた。初恋の女性の旧宅など、青春時代を過ごした野口英世ゆかりの場所が通りにはある。

また、いにしえ夢街道は、飯盛山の山裾に伸びている道。この通りには歴史的な資源がたくさんある。例えば、白虎隊の少年たちが切腹をした飯盛山、会津藩主の墓のある松平家墓所、新撰組で名を馳せた近藤勇の墓もある。

城下町あいづ道草街道は、このような資源を活かして、歴史的にも貴重な様々な資源を、そぞろ歩きをしながら体感していただきたいという取り組みである。



■ 歴史的建造物を活用した地域づくり

七日町通りについては、商店街の活性化ということで取り組んできた。七日町通りまちなみ協議会が発足して今年で22年になる。協議会が立ち上がる前は、3軒に1軒が空き店舗で、観光客や買い物をする人もまばらな通りだった。

実は七日町通りは、かつては会津五街道のうち3つの街道が通る幹線道路だった。野口英世青春通りから西に伸びる通りで、越後街道、米沢街道、下野街道(日光街道)が通り、江戸時代から大正、昭和と、会津若松でも唯一の繁華街といわれるくらい栄えた通りだった。昭和50年~60年ごろから、新設されたバイパスの方に大型ショッピングセンターができたこともあり、町の中の商店街を訪れる人が減少し、空き店舗も目立つようになってしまった。そのような中で立ち上がったのが、七日町通りまちなみ協議会だった。

協議会では、商店街の活性化を図るにはどうすればいいかを考えていった。七日町通りには、明治時代後半から大正、昭和の初期に建てられた歴史的な建物が残っていたので、これを切り口に町の再生を図ってこうということで取り組みを始めた。

建物をどのようにしていったか、その事例をいくつか紹介したい。町並みの景観整備として、例えば、改修前は煙草の自動販売機が店の前に並んだ米穀店が、業態を変更して茶屋となり、建物も板壁や格子を入れるなど趣のあるものに改修した。

会津若松市では平成4年に景観条例を制定しており、2年後の平成6年に七日町通りまちなみ協議会が立ち上がったことから、さっそくこの条例により、上限が70万円で、2分の1が補助される市からの補助金を活用した。現在までに50数件がこの補助金を使う形でまちなみ整備を進めてきている。



■ 「駅カフェ」を設けた七日町駅舎

通りの西のはずれにJRの七日町駅がある。駅舎の改修前は殺風景な建物で、しかも駅前が駐輪場になっていて景観的にも美しくないとこだった。これを平成14年に県とJR、そして私たちがお金を出して、基礎はそのままにして外観を改修し、中に駅カフェをつくった。駅は無人駅だが、駅カフェに我々協議会のスタッフがいてカフェを運営している。会津地方の17市町村のアンテナショップの機能を兼ねた駅舎になっている。駐輪場は駅舎の後ろのホーム側に移動し、駅前をロータリーにして、まちなみ周遊バスのバス停になっている。

七日町通りの中ほどには、七日町市民広場を設けた。昔ガソリンスタンドだったところが廃業し、そこでイベントなどをやっていたところを活用した。ここを県と市で土地を買収し、さらに市のほうで屋根付きのステージを設置した。今年3月にはウッドデッキにして、その周囲は県のほうで土地を買収し、イベントもできる憩いの広場となっている。

七日町の修景 ④ 複合店舗「アイハッセ」



江戸時代の都市計画が残る四ツ角

太郎焼という大判焼きの店舗は、空き店舗を活用し、入居と同時に雰囲気のある建物に改修した。また、病院だった建物は、いくつかのテナントが入るテナントミックスの複合施設に改修して、活用している。

七日町通りは、東のはずれにある大町四ツ角から、西のはずれの七日町駅まで、約800メートルある。まちづくりも、上の区、中央区、下の区という3つに分けて、それぞれ取り組んでいる。四ツ角は城下町の中心となっていたところで、クランク状の四ツ角になっている。会津若松の場合、いにしえ夢街道がある東の方が高く、西に行くに従って低くなる緩い傾斜になっている。江戸時代、430年くらい前に蒲生氏郷が会津のまちづくりをしたとき、水路を南北に分水するために、一度鉤型の十字路にするという都市計画をした。そのときの形状が、400年余りの歳月を経て今に残っている。ここが起点となり、会津五街道が通っている。

上の区は、洋館造りが多いエリアで、大正3年に建てられた洋館造りの3階建ての建物が現存している。昭和初期に建てられた銀行だった建物もある。中央区には市民広場、下の区には渋川問屋という郷土料理店がある。

七日町通りの景観



地域づくりの中で新たに発見した資源

七日町通りの魅力は、町並みの景観だけではない。地域づくりに取り組む中で、さらに新たな観光資源、歴史的資源が発見された。七日町駅の向かいにある阿弥陀寺には、木造3階建ての御三階がある。これは鶴ヶ城の本丸にあった築300年の建物で、戊辰戦争の後、明治3年に鶴ヶ城から今の場所に移築された。

阿弥陀寺には、戊辰戦争で戦死した東軍戦士、1,281体の墓がある。その墓を鎮魂するための本堂として鶴ヶ城から移築したのが御三階である。建物の中には秘密の部屋があり、殿様の密議所として使われたのではないかと囁かれている。

また、新撰組の剣の使い手であった齊藤一の墓もある。彼は明治時代になって藤田五郎と名乗り、大正4年に72歳で没した。亡くなったのは東京だが、本人の遺言により、会津の阿弥陀寺に埋葬されている。

このように、風景街道の地域づくりを進める中で、それまで気づかなかった貴重な歴史的資源を発見することができたことは、我々にとっても良かったと思っている。



七日町の地域資源(阿弥陀寺)



交流事業(のしろ白神ネットワークと七日町)



風景街道を通じた交流事業

風景街道を通じて、秋田県能代市の「のしろ白神ネットワーク」との交流事業が始まっている。東日本大震災があった後、風評被害で観光客が減り、苦しんでいる会津若松に対して、のしろ白神ネットワークの方々から声をかけていただいた。能代市でのイベント会場で、喜多方ラーメンなど会津の物産を販売してもらったことをきっかけに、末永い交流を続けようとして協定を結んだ。2年に1回程度、お互いに行き来をして交流を深めている。

歴史的資源の多い、いにしえ夢街道

次に、いにしえ夢街道についてお話したい。2018年には、戊辰戦争から150年を迎える。いにしえ夢街道には、白虎隊の墓や、会津藩の最後の殿様である松平容保の墓所もあることから、この年を記念して、会津でも何かできないかと考えている。

また、飯盛山にある「さざえ堂」は、イギリスのネイチャー誌に、珍しい建物として紹介された。木造の建物の中は螺旋階段で、昇りと下りがすれ違わないという不思議な造りになっているのが特徴的な仏塔である。

さらに、白虎隊の少年たちが出陣していった旧滝沢本陣は、現存する建物である。それから、家老屋敷を忠実に復元した会津武家屋敷も、いにしえ夢街道沿いにある。

通りの真ん中に太陽が沈む

最後に紹介する写真は、七日町通りの四ツ角、会津五街道の起点でもある大町札の辻から通りを西に見たところだ。5月と9月には、七日町通りのちょうど真ん中に太陽が沈む。歴史的遺産や建物だけではなく、このような自然の風景も地域の大切な資源ではないかと考えている。

ぜひ、5月と9月には、七日町通りを訪れていただき、通りに沈む夕日を眺めていただければと思う。

会津五街道の起点、大町札の辻(四ツ角)から七日町通りを西に見る。5月と9月、通りの正面に太陽がゆっくと沈む。



開催地報告その2 - ①

震災復興と道の駅 **道の駅「よつくら港」**

大震災時の道の駅の活動（復興セール・イベント）及び震災後、新たな地域の拠点として児童支援施設などの整備による地域の復興を支援



■ 報告者

道の駅「よつくら港」運営
NPO 法人よつくらが 理事長

伊藤 浩一 氏



■ 四倉町について

福島県の東に位置するいわき市四倉町は、
西は阿武隈山系に囲まれ、東は青々とした太平洋に面しており海洋性気候のため、極めて温暖で自然豊かなみどりあふれるまちです。
この恵まれた自然が、おいしい海の幸や山の幸をつくりだしています。



■ 漁業の町の衰退で立ち上がった市民会議

四倉町は、福島県の東に位置するいわき市の北部にある。西は阿武隈山系、西は青々とした太平洋に面している。海洋性の気候で、きわめて温暖で自然豊かな緑にあふれる町である。

200 カイリの前は、さけ・ますなどの漁業が中心で、ほかに、セメント工場と、そのセメント工場に石灰石などを供給する鉱山があった。主に漁業の町として発展してきた。

200 カイリの後に、漁業がだめになり、町は衰退した。そこで、20 年ほど前に、四倉町を何とかしようということで、「四倉ふれあい市民会議」を立ち上げた。十数年前にはいわき市とパートナーシップ協定を結び、四倉町のランドデザインを作成した。

私たちは四倉町のいろいろな団体と行政とが協力してまちづくりをしようということを基本的に活動している。

四倉町の主なイベントとしては、1 月には妙見堂ダルマ市がある。これは町の青年団が中心となって開催している。5 月 4 日には、諏訪神社例大祭があり、女神輿が海に入る写真がマスコミ等でよく取り上げられ、女神輿で知られている。しかし、東日本大震災以降は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により中止している。例大祭の主催は諏訪神社だが、四倉町の全ての団体が参加し、町の祭りとして盛り上げている。

7 月には、四倉海水浴場の海開きがある。いわき市では震災後、勿来海水浴場と四倉海水浴場の 2 か所の海水浴場が開設している。開設にあたっては、行政嘱託員（区長）が中心に活動している。同じく 7 月には、「四倉ねぶたといわき踊りの夕べ」が開催される。青森県のねぶたの約 2 分の 1 の大きさのねぶたをつくり、商店街などまちなかを練り歩く祭りを行っている。また、毎年、いわき駅前が開かれる「いわき踊り」に先立って、いわき踊りの四倉大会を開催している。

8 月のお盆の時期には、郷土芸能の「じゃんがら念仏踊り」が、地元の青年団によって行われる。さらに、震災からの復興と、震災で犠牲になられた方の鎮魂を願って、花火大会も行われている。

9 月には、いわき風揚げ大会。それから、毎月第 4 土曜日と日曜日には、道の駅でお世話になっている方々への感謝を込めた「道の駅 よかっぺ市」を開催している。

■ 四倉町の主なイベント

- 1 月 8 日 妙見堂ダルマ市
- 5 月 4 日 諏訪神社例大祭(女神輿等)
- 7 月中旬～ 四倉海水浴場開設
- 7 月下旬 四倉ねぶたといわき踊りの夕べ
- 8 月お盆 じゃんがら念仏踊り
- 8 月 16 日 復興・鎮魂花火大会
- 9 月下旬 いわき風揚げ大会
- 毎月下旬等 道の駅よかっぺ市

■ 道の駅

常磐自動車道いわき四倉 IC より車で約 15 分
(国道 6 号線沿い、四倉海岸に隣接)



- < 車 >
● 三郷～いわき四倉 IC …… 約 2 時間【常磐自動車道】
● 仙台宮城～いわき四倉 IC …… 約 2 時間 40 分【東北自動車道】
- < 徒歩 >
● 上野～四倉(いわき乗換所) …… 約 2 時間 30 分【J-R・白立】
● 仙台～四倉(山形駅) …… 約 4 時間【東北新幹線】

■ 県内で 19 番目にオープンした道の駅

次に、道の駅「よつくら港」についてお話ししたい。道の駅よつくら港は、国道 6 号線、陸前浜街道に面した四倉漁港区内にある。福島県内では 19 番目の道の駅としてオープンした。フラガールで有名ないわき市にちなんで、ハワイをイメージするような椰子の木を植えた四倉海岸に隣接している。海辺ではサーフィンを楽しむ人たちが多く、週末だけでなく、平日もサーファーズの姿が見られるところである。

道の駅よつくら港は、常磐自動車道いわき四倉インターチェンジ、JR 四ツ倉駅からも近く、恵まれた立地にある。東京からは約 2 時間～ 3 時間の距離である。

館内は 1 階が直売所、2 階がフードコート式のレストランになっている。レストランでは地元食材を使ったメニューなどを用意しており、また、2 階テラス席からは四倉漁港や四倉海岸を眺めることができる、非常に景観の良いところとなっている。

東日本大震災による津波被害を受けたことから、震災後にリニューアルオープンした建物は、災害に強い設計となっている。

道の駅よつくら港の前身は、「ふれあい物産館」で、1998 年 10 月にオープンした。県と市の補助をいただき、網蔵として使われていた建物を改装して開設し、地域の物産を販売した。

2009 年 12 月には、いわき市と我々 NPO の会員などが出資をして、1 億円近いお金をかけて建てた「よつくら港交流館」がオープンした。この開設から 1 年余りたった 2011 年 3 月に東日本大震災が起き、津波によって建物は甚大な被害を受ける。

津波は一波、二波、三波と立て続けに襲い、二波の高さは 3 メートルから 3 メートル 50 センチほどだった。四倉の場合は、波とともに砂と、海底にあるヘドロが悪さをして被害が拡大した。波とともに流されてきた漁船が建物にぶつかるなどして、建物は全壊状態となった。

地震が起きた 2 時 46 分は昼食時間帯を過ぎていたことと、津波がくるという情報も早く入ってスタッフが館内にいるお客さんをスピーディーに誘導できたことで、人的被害がなかったことが幸いであった。

■ 被災の状況

2011.3.11

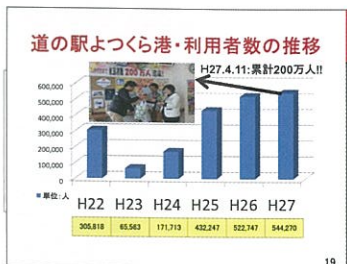
■ 震災による被害



2011.3.11

■ 津波のつめあと





■震災からの復興の歩み

次に、震災からの復興の歩みについてご紹介した。2011年4月2日には、がれきの片付けをした。約5日間、ボランティアの方々と、四倉ふれあい市民会議で地域間交流をしていた奥会津の三島町や北塩原村の皆さんに来ていただいて、がれきの片付けと、砂や泥の回収を行った。

4月16日には、全国から届いた支援物資を使い、毎週土曜日と日曜日に道の駅で炊き出しを行った。

6月には、「灯そう ふくしまに光を」というキャンドルイベントを開催した。8月には、震災で犠牲になった方々の鎮魂と、地域の復興を祈念して、花火大会を開催した。

翌年、2012年の1月には、大型テントでの道の駅の仮営業にたどり着いた。そして同年8月11日、交流館リニューアルオープンということで、地元の団体による太鼓演奏で、威勢よく再オープンを果たした。

2013年の7月15日には、地元区長会の尽力により、勿来海水浴場に続き、四倉海水浴場の海開きを行うことができた。翌月の8月11日は、リニューアルオープン1周年を記念し、お世話になっている全ての団体、地域の方々をお呼びして、1周年の記念の日を祝った。

2014年4月1日には、いわき市が情報館を再オープン。同じく4月26日には、「チャイルドハウスふくまる」がオープンした。これは、東日本大震災後に布袋寅泰さんと吉川晃司さんと結成したロックバンド、コンプレックスが、岩手、宮城、福島県の3県に義援金を寄附していただき、そのお金をもとに建てたもの。NPO法人福島震災遺児を見守る会と、我々よつくらが共同でコンペをして、いわき市に寄附された義援金から9,600万円をいただいた。この義援金で、震災遺児孤児のために、そして、地域の子どもたちが放射能を気にせずに遊べる屋内遊び場を、道の駅よつくら港の道路を挟んだ向かいに開設した。翌月にはケネディ駐日アメリカ大使もここを訪れ、子どもたちと遊んでくれた。

道の駅の海岸のほうには、ふれあい広場を整備した。この頃には放射能の数値も低くなったため、親子が広々とした屋外の空間でのびのび遊べるようにとの思いが込められている。

2015年11月からは、「海山味寄港」と名づけて、海と山の交流を行っている。会津の三島町の新そばまつり、物産の販売などを行った。今年はその第2回を開催し、奥会津の5町村と一緒に開催することができた。来年以降もこの交流活動を続けていきたいと考えている。

2015年には、地元の四倉小学校の5年生、6年生と「よつくらまちあるきマップ」をつくった。小学生と行政、我々よつくらがの会員などで、子どもたちとまちを歩き、ワークショップを行って、まちで見つけた四倉のいいものをデザインして仮設テントに描いた。この仮設テントの中は、その半分が四倉のねぶたをつくるねぶた小屋となっている。また、四倉海岸の砂浜では9月の最終日曜日に全国から凧の愛好者が集まって凧揚げ大会が行われており、テントの残り半分には、その参加者からいただいた凧を展示している。

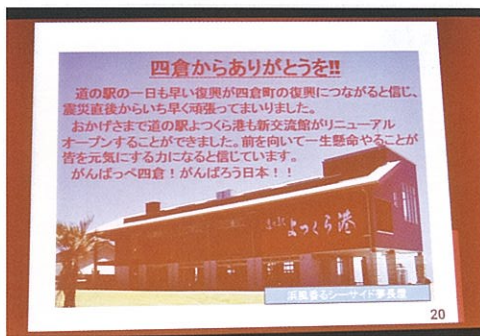
また、地元の小学生とは、毎年、3月11日に記念の植栽をし、2時46分に合わせて追悼のセレモニーを行っている。

■地域に愛され、貢献できる道の駅として

道の駅よつくら港の利用者数の推移をみると、平成23年には東日本大震災の影響でだいぶ落ち込んだが、そこからおかげさまで右肩上がりに伸びている。平成27年4月には累計200万人に到達した。平成27年度の売り上げは約2億2,000万円だった。ただ、この伸びが今後も続くかどうか楽観視はしていない。15%程度の減収はあるのではないかと見ている。

私たち道の駅よつくら港、そしてNPO法人よつくらがは、これからも地域の人たちに愛されること、そして地域社会に貢献できるような道の駅、団体として頑張っていきたいと思っている。

頑張ろう四倉、頑張ろういわき、頑張ろう福島県、そして、頑張ろう日本ということで、これからも力強く、四倉町といわき市、福島県のために活動をしていきたい。



開催地報告その2 - 2

震災復興と道の駅 道の駅「遠野」

大震災時の被災地後方支援基地としての役割と、震災後、沿岸地域への復興支援、また地域の観光振興に向けての拠点化



■ 報告者
道の駅「遠野」前駅長
(一社)遠野ふるさと公社 事務局長
菊池 美之 氏



■震災前の訓練が生きた道の駅の支援活動

道の駅「遠野」では、震災の3年前に自衛隊と岩手県、遠野市、そして地域の住民で「みちのくALERT」という、万が一震災が起きた場合、津波が来た場合にどういった支援ができるかということで訓練を行った。遠野は4号線と沿岸地域の真ん中にあり、釜石、宮古、大船渡といった被災地域に対して扇の要のような場所にある。そこに道の駅があり、沿岸部までヘリコプターで15分くらいで行けるといっても、震災の3年間から炊き出しの訓練や、運動公園を活用した訓練などを実際に行っていた。

2011年3月11日、午後2時46分の発災直後に運動公園を開放し、その夜には自衛隊が運動公園に集結していた。これにより、2日くらい活動が早まったと自衛隊の方々から聞いている。やはり、地域住民を巻き込んだ準備は必要だということを実感したところである。

震災後は最初に、おにぎりとお水を提供した。おにぎりは14万個、これを毎日、高校生を含む地域の皆さんが握った。次に衣服、そしてお風呂といった順番で支援を行った。私たちが管理しているお風呂にバスを無料送迎させ、昼間は被災地の皆さんの入浴を無料で、夜は自衛隊の皆さんの入浴を300円で、ということでやらせていただいた。お風呂を沸かす重油は、市役所で使っていなかったものを提供していただいた。



店舗を失った人々には道の駅のスペースを提供し、週末ごとに復興市、「三陸応援フェア」を行った。この際の手数料を5%いただき、これを使ってラジオのコマーシャルを流した。

道の駅には、国交省の協力で震災伝承コーナーを設けた。パネルを展示し、震災時のビデオを流した。ただ、実際の映像が流れるため、見るのが怖いという声があり、現在は映像は止めている。

また、大船渡の魚店に入ってもらい、沿岸直送鮮魚店ということで、道の駅で魚を売るということも行った。ほかに、大槌中学校と地元の綾織中学校の交流も行った。

沿岸部地域との共同で、新商品の開発も進めている。大槌町にある赤部酒造醸造と提携し、遠野のりんごを使ったリキュールや、郡山市の笹の川醸造にお願いし、ホップが入った焼酎などを開発した。ほかにも、大船渡のわかめが入ったディップソースをつくり、道の駅で販売している。



■道の駅の連携と課題

次にやりたかったことは、岩手県内30カ所にある道の駅の連携。道の駅のオリジナル商品をつくり、「じもとといっぴん」ということで、箱の裏に岩手県の全ての道の駅が入った南部せんべいを販売した。この売り上げの5%を国道事務所で管理してもらい、それをスタンプラリーや景品の交換に使うことにした。また、道の駅の駅長たちが全国の道の駅大会になかなか行けないことから、その費用負担をこの売り上げの5%からまわせるように考えた。当初は1,000万円の目標だったが、実際の売り上げは600万円程度だった。

道の駅はそれぞれ違い、連携が難しいというのを感じた。何か方法がないかと模索している。

また、遠野は十数年前にどぶろく特区に認定されている。そこで、三陸鉄道で「どべっこ列車」を走らせた。貸し切りにした列車の中で、お客さんにどぶろくを飲んでもらおうという企画。車両の貸し切り代は5万2,000円だが、今だと岩手県から2分の1の補助が出るので2万6,000円で借りることができる。40人が乗れる車内では語り部による民話や、大船渡のホタテなど、駅ごとにおいしいものを食べてもらうなどして、楽しんでもらった。



■観光マーケティングからわかってきたこと

このように、様々な試みはしてきたが、なかなか観光が伸びて来ないことから、観光マーケティングを行うこととした。まず、市場環境調査を仙台居住者を対象に行った。それに先立って、遠野の道の駅「風の丘」で、800人くらいにアンケートをとった。その中で、一番リピート率が高いのが、仙台から来ている20代~60代の人たちだったことがわかったことから、仙台を対象にアンケート調査を実施した。

調査の内容は、岩手県内の観光地認知度と、来訪意向の2つ。遠野の観光地認知度は、盛岡、平泉、花巻に次いで4番目だった。遠野のイメージとしては、自然が豊か、河童の不思議な世界、

〇行きたいと思う遠野の「観光資源」

●4人に1人が行きたいと思っている	
第1位 カッパ淵	25.3%
●6人に1人が行きたいと思っている	
第2位 遠野ふるさと村	15.8%
第3位 郷土料理を食べる	13.0%
●10人に1人が行きたいと思っている	
第4位 ジンギスカン食堂	11.8%
第5位 遠野「風の丘」	11.0%
第6位 南部曲り屋千葉家	10.6%
第6位 SL銀河をみる	10.6%

遠野物語の世界、というのが上位を占め、ずっと下の方に食べ物、郷土料理が出てくるという結果だった。

遠野市内の観光資源の認知度については、カッパ淵が1位で59.2%、2人に1人が知っているという結果だった。3人に1人が知っているのが、遠野ふるさと村、南部曲り屋千葉家ということだった。

また、行きたいと思う遠野の観光資源は何かを聞いたところ、1位はカッパ淵で25.3%、次が遠野ふるさと村で、郷土料理を食べたいというのが3番目に出てきた。郷土料理を食べるということでは、10人に1人しかジンギスカンを知らないということもわかった。その相関関係を、縦軸に認知度、横軸に来訪意向で見ると、カッパ淵は認知度も来訪意向も高いが、郷土料理については、食べに行きたいと思いつつも認知度は低いという結果だった。

この調査からわかったことは、遠野は田舎で不思議な世界であって、行きたい有名地はカッパ淵であること。ただ、郷土食を求めて遠野に行きたいのだけれども、何が有名なかわからない。それならば、郷土食の情報発信をふやす必要がある。では、だれにいつ、どうやって情報を届けようかということが課題となった。

単にチラシを配布して終わるのはなく、マーケティングの結果をもとに、対象となり得る人に対して、欲しい情報を提供することにした。遠野を知りたい人がまず見るのは、遠野市や観光協会のホームページではないかと考え、ここから情報発信をしようと思える工夫をしていった。そして、ターゲットは仙台に絞ろうということを進めている。



遠野のビア・ツーリズム

遠野市のホップを使ったキリンビールの缶に、岩手県遠野産と書いてある。遠野市は広告料を一切払っていないが、キリンビールさんが情報発信をしてくれている。また、遠野に広告会社をやめて1ターンした青年が、遠野で農業を始めた。彼は、離農が進んでいるホップ畑を借りてホップをつくり、また「パドロン」という、ピーマンとシシトウを掛け合わせた10個に1個がとても辛いという野菜を作り始めている。キリンがこの食材をビールに合う野菜としてPRしてくれている。先日は横浜の赤煉瓦倉庫でビアフェスティバルがあり、そこに遠野も出店してパドロンをはじめ、地ビールやウイナナーを販売し、1週間で1,300万円ほどの売り上げがあった。



もう1つ、富士ゼロックス社さんと、廃校になった校舎を利用し、研修施設にした。遠野の自然の中で、人と人が言葉でコミュニケーションする場所として「地域未来づくりカレッジ」と名づけ、老若男女が集まれる仕組みをつくっている。

遠野市内でもビアフェスティバルを開催し、「ビア・ツーリズム」を今盛んにPRを始めている。ホップの郷でパドロンを育て、おいしいビールを飲もうといった企画で、平成27年度で4,000人ぐらいの来訪者があった。農家民泊で、動いて汗をかき、おいしいビールを飲みながら農家の人たちと話そうという形ができあがりつつある。農家民泊は1泊4,000円から6,000円くらいで、145の農家が登録をし、最初は消極的だった農家も今では楽しみながら協力してくれている。



全体会総括

■ 総括者 / NPO日本風景街道コミュニティ代表理事・
 国立大学法人 筑波大学 システム情報系 社会工学域教授
石田 東生

3つの風景街道と、2つの道の駅の報告をいただいた。共通しているのは、皆さんが地域に愛情を持って活動しておられるということ。最初の日置さんの話を伺って、若者と一緒に地域づくりをする姿勢を改めて考えさせられた。また、畠腹さんからは、年齢を重ねても元気に活動していくにはどうしたらいいかというモデルをいただいた。庄司さん、伊藤さんには、地域を愛するということがどういうことかを学ばせていただいた。また、菊池さんの何でもやってみようという行動力にも感心した。

1つだけ、皆さんと一緒に考えたいことを申し上げたい。菊池さんのお話の中に、道の駅の連携が難しいという報告があった。私も道の駅に関わっているが、連携は常にテーマになっている。連携が難しい理由の1つは、経営主体が異なること。そこをどうつなげるかということに、風景街道の考え方が活かされるのではないかと考えている。風景街道はルートの物語をどう共有していくが基本理念。そこを道の駅と共有できないかと考えている。そのヒントを今日はいただいたと思う。今後、さらに議論を広げていただきたい。



●第1分科会

風景街道活動による地域振興「新たな生活景の創出」

日本風景街道で着目されるのは、自然の中で営まれる風景（生活景）。地域振興とは、地域の豊かな生活景を守り、創り、伝えること。日本風景街道活動による地域振興の「心」「技」「体」とは…。



■座長

NPO 法人 地域づくりサポートネット 代表理事
コミュニティシンクタンク 研究員

山内 秀彦 氏

●ゲスト

原文宏 氏（シーニックバイウェイ支援センター代表理事）

佐藤 雄一 氏（コンセプト株式会社）

熊川 榮 氏（婦恋村長）

永江 寿夫 氏（若狭町歴史文化課 課長）

◆話題1：「互産互生」の取り組みから生まれるもの

風景街道の活動を進める中で、北海道の中での連携だけでなく、全国的な連携をしながら経済活動にもつなげていくことが必要ではないかとの思いから、北海道と静岡での連携を始めた。はじめに物の交流ということで、お互いの物産を販売してみた。その土地ならではのものがやはり売れるということがわかった。これを進化させていったのが「互産互生（消）」。北海道の豊頃町と静岡の掛川市で、人とモノとライフスタイルの交換ということで行っている。

この中で生まれたのが、サイクルツーリズム。冬は雪や寒さでサイクリングを楽しめない北海道のサイクリストに掛川に行ってもらい、夏は掛川のサイクリストに涼しい北海道を走ってもらおうというもの。いわば季節を交換して人が行き交う関係づくり。最近はお互いの住民が1週間ずつお互いのまちに住み合うという、ライフスタイルの交換も始めている。実験移住ということで、二拠点居住につながればいいと考えている。

このような中で、10人の法人及び個人が出資し、合同会社互産互生機構を立ち上げた。これにより、人とモノとライフスタイルの交換を事業ベースでできる環境をつくらうとしている。

その事業の1つとして、緑茶を飲む習慣のない北海道に、緑茶文化を広めようということから、フルーツ系スイーツと緑茶の組み合わせを提案したところ、かなり好評だった。また、農の営みの交換ということで取り組んでいるのが、掛川特産のキウイを豊頃町の雪室で熟成させるプロジェクト。「スノーキウイ」と名づけられ、こちらも高い評価を得た。引き続き、お互いの魅力や特徴を活かした互産互生の取り組みを進めていきたい。



◆話題2：「日本ロマンチック街道」の取り組み

ドイツのロマンチック街道には、日本人観光客が20～30年前は300～400万人が訪れ、今でも200万人が訪れている。その魅力を探ろうと、私自身、ドイツのロマンチック街道を50回訪ねた。

日本ロマンチック街道は、1980年代から中澤先生の提唱により協会をつくらうということで始まった。当初は民間と観光協会だけだったが、自治体も入ってもらうようにして協会を設立した。1988年には、ドイツロマンチック街道協会と姉妹街道の締結をし、交流を深めている。

現在の日本ロマンチック街道は、長野県の上田市、東御市、小諸市、御代田町、軽井沢町、それから群馬県の婦恋村、草津町、長野原町、東吾妻町、中之条町、高山村、沼田市、みなかみ町、昭和村、川場村、片品村、そして栃木県の日光市ということで、総延長約320キロの街道。ここを訪れるお客様は年間約3,000万人となっている。

私も婦恋村、草津、軽井沢方面には、上信越高原国立公園がある。それから、日光の方には、尾瀬国立公園、日光国立公園がある。この国立公園を結びつけた、3県にわたった街道が日本ロマンチック街道である。

現在、日本風景街道は138あるが、ぜひ国土交通省の皆さん、1街道1億円で、トイレをきれいにして世界一のトイレをつくってはどうか。マンパワーで力を合わせて、1年に20街道、5～6年かければ、全ての日本風景街道のトイレが世界一きれいになる。そのようなことで、ぜひとも力を合わせて、美しい風景街道づくりに取り組んでいきたい。

ゲスト



原文宏 氏
（シーニックバイウェイ
支援センター代表理事）



佐藤 雄一 氏
（コンセプト株式会社）



熊川 榮 氏
（婦恋村長）



永江 寿夫 氏
（若狭町歴史文化課 課長）

●第1分科会

◆話題3：熊川宿、御食国若狭と鯖街道

鯖街道というネーミングは、古文書には一切出てきていない。北大路魯山人が昭和14年に書いた本の中で若狭の鯖を絶賛していることから、昭和の中頃から、京都の人たちに鯖が賞味されるようになった。

熊川宿は、平成8年7月9日に国の重要伝統的建造物群保存地区となり、20年がたった。同じ平成8年には、旧建設省の歴史国道にも選ばれ、また、国土交通省の水の郷百選にも選定されている。さらに、環境省の名水百選、平成18年には日本風景街道の認定を受けた。そして平成27年「御食国若狭と鯖街道」として日本遺産に選ばれるなどして、まちづくりのバックボーンになるものができてきた。日本風景街道としては、我々のところは熊川宿に特化した2キロ足らずのラインだが、熊川という町並みをいろいろな形で、地元の人たちと行政と一緒に進めてきた。

日本遺産となった「御食国若狭と鯖街道」は、海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群ということで、この海と都というのは、京都だけではなく、古代においては奈良の都まで若狭の食を送っていたということが、平城京の木簡からも明らかになっている。

鯖街道は実は網の目状に展開している。メインの道は熊川を経由して朽木、梅の木を経由して京都に至っている。御食国（みけつくに）の御食というのは、天皇、神様にお供えする食のこと。神様にお供えする食べ物を生んでいた国ということで、その役割を古代から若狭は担っていた。

町並み保存としては、古い町屋でも住めるようにできるモデルハウスとして展開した。この改修のしかたを見て、住民が国の町並み保存の制度に乗ろうと決断され、100棟の建物を改修してきた。

前川用水という水路は生活用水でもあり、一日先頭の牛が行き交う場所で、牛が飲む水でもあった。浅野長政が近江と若狭の国境の要衝として、16世紀はじめに宿場を整備した。この水路の護岸を石積みにもどした。特殊な方法で、石を貼り付ける形で、後ろからコンクリートを流すという作業を行っている。

熊川は観光地をめざすことを考えずに、まちづくりということでやってきた。一番のテーマは、みんなが良くなるまちづくり。そのための申し合わせ事項をつくった。平成20年には、まちづくりの観点で防災まちづくり計画を策定した。空き家も多いため、近隣火災通報システムをつくり、自分の家だけでなく、隣の家に火災が発生すると、その近隣に通報がいくようになっている。この計画は、防災まちづくり大賞をいただいた。

平成8年のころは観光地ではなかったが、今では40万人を超えている。ただ、今でも店は少なく、ゆったりとしてはいるが、経済的な意味でも、観光客がお金を落としていってくれるようなことを考えていこうと思っている。舞鶴若狭道が全線開通したことで、さらなる観光誘客を図ろうとしている。

◆論点

- ・138ある日本風景街道のネットワークをうまく地域振興にいかしていきたい。日本全体としてインバウンドが盛り上がってきているが、その一方で、日本風景街道で関わった人たちがお互いに日本の中で行き来することも重要だと思う。これにより、地域経済もよくなっていくのではないかな。インバウンドに比べると、国内旅行者は横ばいから下がっている。そこを風景街道のネットワークで盛り上げていきたい。
- ・市町村同士の交流だけを考えるのではなく、エリアとエリアの交流も考えていきたい。それをさらに広げて、エリアとエリアとエリアがつながっていくことが望ましい。

◆座長

もともとある生活景を守り、活用してきた風景街道の取り組みだったが、さらにいろいろな人を巻き込みながら、地域と地域のつながりをつくる新しい仕組みをつくっていこうということ、そういう中で地域振興やビジネスの展開をしていかないとけない時期に入った。

今日はそのような取り組みを話していただいた。いろいろな交通軸を使いながら、地域が連携していく。その活動の成果を地域の人に認知していただくために、見える化をしていく努力をされているのを感じた。見せ方としては、イベント、デザイン。プロの存在も必要。リーダーとして地域をつなぐ人も必要。エリアとエリアの交流を深めていく。見せ方も含めて磨き上げていくことが求められている。その魅力に魅かれて人が来て、商品も売れていく。

地域と地域をつなぐツールとして風景街道をうまく使っていきことができる、ひとつのブランドになっていくと感じた。風景街道ゆかりの地、縁を使い人の縁をネットワークにしていく。地域と地域の交流が進むと、防災のまちづくりという観点からも、いざというときに役立つ仕組みができるのではないかな。そのようなことで、風景街道の取り組みに可能性を感じた。



●第2分科会

風景街道活動を次世代に継承するために

風景街道の活動もメンバーの固定化や高齢化などで、その「持続」という課題が顕在化。今後活動の存続に向けては、若年層の参加促進や後継者づくりが必要とされている。若年層の積極的な活動参加に成功している先進事例を紹介するとともに、如何に若年層の参加を促すかの議論を行う。



■ 座長

(一社)北海道開発技術センター上席研究員
(一社)シーニックバイウェイ支援センター理事

紺野 裕乃 氏

● ゲスト

山崎 和夫 氏 (十勝シーニックバイウェイ南十勝夢街道)

日置 友智 氏 (ハイスクールサミット参加者・
東北大学理工学部研究科 物理専攻修工1年)

谷越 衣久子 氏 (日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会)

◆話題1：学校シーニックバイウェイの試み

ー子どもたちの提案による地域づくりー

南十勝夢街道は、日高山脉の東側にある十勝地方の南に位置するエリア。ルートの特徴としては、四季折々に優美な姿を見せ、襟裳岬から大雪山系までつながる日高山脉や、日本一の食料基地で、食料自給率1,100%を誇る広大な畑と酪農景観、耕地防風林が特徴的。ルートの中には、日本屈指の清流が3本流れている。寒冷地であるがゆえの霧氷、樹氷は想像以上の美しさ。漁港が3港あり、サンマ、シヤケ、シシャモ漁などが盛ん。大型の観光施設や歴史建造物はないが、雄大な山々、広い畑、清流、太平洋の景観は、北海道の開拓精神を目で確かめられる地域となっている。ここに育つ子どもたちにとってもいい環境で、ルートのテーマは「夢を育む海と大地と清流のみち」としている。未来へつなげる夢を育むため、観光、景観、地域を3つの柱として活動している。

学校シーニックバイウェイは、将来、風景街道活動を継承していく人材を育むために取り組んでいる。学校に出向いて子どもたちにシーニックバイウェイについて伝えたり、子どもたちの楽しみ方に耳を傾けて大人も実践してみようといった活動。小学校高学年を対象として、授業の中で行っている。地域の中での子どもたちのおすすめの場所、情報などを地域資源としてマップ化したり、子どもたちが勤める「見る・食べる・体験する」を商品企画として、親子を対象としたモニターツアーを企画し、参加者から高い評価をいただいた。

今後の課題は、学校への連絡調整や町村との連携。5町村あるので、温度差が若干でてる。よく練った企画を提案し、粘り強く、楽しみながらやるのがモットー。我々が楽しんで活動していることが子どもたちに伝わればいいと思う。そして、それは確かに伝わっているのではないかと感じている。

◆話題2：未来のまちづくり・みちづくり

「ハイスクールサミット in 東北」

ー東北から日本、そして世界へー

私がハッピーロードネットの活動に関わったきっかけは、平成22年のハイスクールサミット in 東北に参加したこと。仙台で開催した初めての東北大会だった。他の高校生の発表を聞きながら、自分は違う意見を持ちつつ、言い出せないままに眺めていた。そんな私に主催者の西本さんがマイクを向けてきた。「何か言いたそう、言ってみて」と言われ、自分の意見を言うことができた。それから8年、ずっと活動に関わっている。高校生の声をすくいあげる取り組みに魅力を感じている。

その後間もなく東日本大震災があり、地域のために何かしたいという高校生の思いと、言いたいこと、やりたいことを言ってみなさいと言ってくれる大人がいて、いくつかの活動につながってきた。実際に耳を傾けて聞いてくれる大人がいたことが、高校生のモチベーションにつながり、今まで続いているのだと思う。

高校生は受験勉強や、就職活動などで実は忙しい。一過性のイベントではなく、何か学べるものがあると参加しやすい。違う世界を覗ける、自分の声が届く、目に見える成果がありそう、といったことがあると引き込まれやすいと思う。大学生も3~4年生になると忙しいので、1年生のうちに巻き込んでおくことも方法のひとつ。私自身、忙しくて無理だと西本さんに言ったことがある。そのとき「本当に面白くないと思ったらやめてもいいよ」と言われた。専門を超えた別の世界に触れることができるのは自分にとって魅力だったので、やめずに続けている。

10キロマラソンを走れと言われても走れないけど、2キロを5回なら走れると言った学生がいる。

ゲスト



山崎 和夫 氏
(十勝シーニックバイウェイ南十勝夢街道)



日置 友智 氏
(ハイスクールサミット参加者
東北大学理工学部研究科
物理専攻修工1年)



谷越 衣久子 氏
(日南海岸地域シーニック
バイウェイ推進協議会)

●第2分科会

高校は3年、大学は4年しかないため、1年間のプロジェクトはスパンが長い。数カ月単位で、ゴールを見つ、達成感を感じながらだと継続できると思う。

◆話題3：宮崎大学と日南海岸きらめきラインの連携・協働 日本風景街道大学宮崎本校 一育つ・つながる一

私たちは平成19年にルート登録し、勉強会を始めた。それを進展させ、平成22年からは日本風景街道大学として毎回テーマを決めた勉強会を2泊3日程度で行っている。

日南海岸きらめきラインは、九州の南東部の海岸線の地方。南国らしい風景、青い空、青い海、白い波をいかに効果的に見せるかという修景をしている場所もある。住んでよし、訪れて良しの魅力あふれる日南海岸地域を目標に、うつくしの道づくり、いやし・もてなしの道づくり、神話と歴史の道づくりという3つの柱で、訪れる人と、迎える地域の豊かな交流を育みながら頑張っている。

体制は民間の協議会、宮崎大学、国・県・3市の行政連絡会で組織している。同じ課題を違う立場の人が共有し、同じテーブルで議論することがパートナーとして大事だと考えている。

学生との関わりとしては、宮崎大学に地域資源創成学部ができるまでは、例えば工学系の先生は、道の機能を卒論、修論のテーマとして与え、私たちがフィールドとして預かった。学生は地域の人と一緒に活動してくれた。

地域資源創成学部ができたことで、これから大学に期待することは、まず、日本風景街道大学でプロセスを一緒に担うことをやっていただければと思っている。今までは民間、行政のメンバーでプロジェクトチームをつくっているが、そこに学生さんに入ってもらえるといい。ルートがめざすものから現状、課題を洗い出し、何を学んでもらって、どういう解決策を見いだそうかというところを一緒に組み立てていくことで、実験としてプロジェクトを成し遂げることができるし、多様な人とも出会える。チームとして、仲間としてやっていきたい。立場は違ってもみんなが一員として、パートナーとして活動することを通して、大学も先生も、地域も学生も育つ。そして我々も育てていただきたい。そういう仲間になりたい。プロセスを重ねていくことが重要だと思う。



◆論点

- ・大学生との関わりについて、学生の立場から。学部単位に縛られず、既存の学生団体と連携しながらやっていくことも可能。大人が環境をつくってそこに学生が入るというのではなく、学生にまかせてもえるとモチベーション維持につながる。
- ・大人から見ると、これから社会に入っていくステップとして、社会が求めているニーズに対して、社会の中の一パートナーとして何ができるかということを経験のうちに感じて育ってもらいたい。サークル活動とは違うので、やりたいことだけをやるのではなく、社会のニーズにどう応えていくかがポイントになる。
- ・学んでもらうという考え方ではなく、若者をパートナーとして、みんなが主役でやらなくてはいけないと思う。学生でも社会人でも、やりたいことをやれば良いと思う。やりたいと思うことにたどり着くためにやりたくないことをやる、ということはある。
- ・自分たち大人も地域や行政から学ばせてもらっている。学生にも、論文も必要だが、地域の人たちのごつごつした手を握りながら、情感を共有することも体験してほしい。
- ・小学生は、予算や実現性を考えずにやりたいことを言う。私たちは、実現したらいいね、どうした実現すると思う？と話しかけていく。子どもたちには事前に、地域のどんな場所で、どんな遊び方をしたら楽しいかを考えてもらっているが、中には親に相談して答えを出さずもいる。それはの中で地域を考える機会になり、そういう時間も大切だと思っている。地域が好きで、このまちで暮らす。そういう考え方を持つと、いつか、得意分野で何かできるかなと思うかもしれない。学生だけではできないこと、一人ではできないことも、予算の確保も含めて、ネットワークで実現できるかもしれないということも伝えていきたい。

◆座長

学生からの意見、大人の意見、それぞれ貴重な意見をいただいた。このように若い人たちとの議論の場があることが、まずは大切だと感じた。若い人のアイデアからヒントを得て、さらに広がることもありそうだ。議論の場はそのきっかけになる。そういう意味で今日はとてもいい時間だった。今後も引き続き、今日のような意見交換ができる場や機会をつくってほしいと思う。



●第3分科会

日本風景街道と「道の駅」の連携による地域振興策

今後、地域固有の観光資源を活かし地域活性化を図るためには、風景街道活動による地域周遊の取り組み（ノウハウ）と、その情報発信拠点としての「道の駅」の連携が有効な手法として考えられる。積極的な連携を可能にするための課題とその克服を先行事例の紹介と、今後の連携のあり方について議論を行う。



■ 座長

九州工業大学 教授
日本風景街道コミュニティ理事
吉武 哲信 氏

● ゲスト

木村 宏 氏（千曲川・花の里山風景街道 北海道大学観光学高等研究センター）
桐木 茂雄 氏（釧路・阿寒・摩周シーニックバイウェイ）
工藤登紀子 氏（日南海岸きらめきライン）

◆話題1：道の駅がつなぐ日本風景街道、そして新幹線からはじまる新たな挑戦

去年、北陸新幹線が金沢まで開通した。飯山駅は長野の次の駅。真ん中に千曲川が流れる飯山市は、四季を活かした観光のまち。和紙、仏壇の産地で、寺町文化が息づく。観光はスキーで花開き、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、エコツーリズムなど、観光形態も時代とともに変遷してきた。

高野辰之の童謡「ふるさと」のイメージを守るため、以前から風景を保全する取り組みをしてきた。山並み、スカイラインを侵すような人工構築物はなるべくつくらない、あるものは撤去していかうという取り組み。沿道をきれいにし、まちの中には雁木の商店街が復元されている。こういう取り組みが市民をあげて行われている。

千曲川・花の里山風景街道は、117号線を軸に風景街道を展開しようと関東では2番目の登録をした。沿道の景観を守ることを主な目的に、情報発信、ブランド化、観光スポットの整備などを行っている。

この風景街道には道の駅が3つ関わっている。道の駅「花の駅・千曲川」が中心となり、地域の人を選んだおすすめスポット50の地図をつくらたり、スタンプラリーも行っている。

一方、去年3月に北陸新幹線飯山駅がオープンした。ここには観光交流センターがあり、飯山市が設置し、観光協会が運営している。道の駅と、新幹線の飯山駅は、イメージが重なるようなデザインをしている。その横に、アウトドアに特化したアクティビティセンターが設置してある。ロードバイクなどちょっとした自転車用を100台、レンタル用に用意し、サイクリング情報やトレッキング情報などを発信している。このアクティビティセンターと、道の駅、飯山駅をつなぐ太いパイプとして自転車を位置づけた。風景街道のエリア内にはサイクルステーションを設け、サイクリングマップも作成した。

国道117号線は、しっかりした歩道があるため、自転車がゆっくり楽しく安全に走れる。このため、今は自転車を持って道の駅を訪れる人もふえており、バイウェイのしくみができあがっている。自転車レンタルは昨年と比べて1.5倍の勢いで伸びている。道路協力団体制度を活用し、歩いたり、自転車で走る上での課題を解決しながら、快適な空間をつくっていきたい。

◆話題2：「道の駅」を拠点としたシーニックバイウェイの活動

釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイは、釧路湿原エリア、阿寒湖エリア、弟子屈エリア、中標津エリアの4つのエリアからなっている。活動としては、クリーンウォークと題した駐車帯のごみ拾い活動や、そらの森（弟子屈飛行場跡地）での植樹会を行っている。植樹する苗は、どんぐりを拾って植えて苗木に育てたもので、こどもたちも参加している。シーニックカフェの収益金をその費用に当てている。今年からは国道沿いに白樺を植えている。数年後には白樺の並木道になる予定。また、北海道開発局と共同で観光客向けのマップも作成している。

風景街道と道の駅の連携による地域振興ということで、「くしろ・ねむろ ぐるっと！スタンプラリー」を行っている。シーニックカフェと道の駅、釧路空港、中標津空港の15カ所と連携したスタンプラリー。シーニックカフェとは、この地域が大好きになる地域の情報を伝える、地域のおいしさを届ける、ゆったりと過ごせる空間をお客様に笑顔で提供する場所。今年のスタンプラリーは、前年よりも利用者が多くなっている。

道の駅を使った活動のもう1つは、車中泊による滞在者がふえていることから、夜間滞在者に関する調査事業を行っている。調査方法は2つ。1つはナンバープレート調査で、どこのナンバーの車がどれくらい駐車しているかを調べた。もう1つはヒアリング調査で、夜間滞在者に滞在理由や地域へのニ

ゲスト



木村 宏 氏

（千曲川・花の里山風景街道
北海道大学観光学高等研究センター）



桐木 茂雄 氏

（釧路・阿寒・摩周シーニックバイウェイ）



工藤 登紀子 氏

（日南海岸きらめきライン）

●第3分科会

ズをヒアリングした。ニーズとしては、周辺の入浴施設や飲食店の情報に対するニーズが高かった。インフォメーションカウンターは6時で閉まってしまうことから、6時以降の情報をとる手段がなかった。このため、夜間の情報提供をする方法として、弟子屈情報掲示板を設け、名刺サイズの各店舗のインフォメーションカードをつくった。どのくらい利用があるかを枚数管理して調査をした結果、入浴施設のカードを持って行く人が多かった。次年度以降はカードにクーポン的なものを付け、利用度を調べたいと考えている。さらに、道の駅から市街地への観光客の流入、地域の活性化を目指して調査を進め、風景街道と道の駅が連携しながら地域のためになる活動を継続していきたい。

◆話題3：日南海岸きらめきラインの活動

日南海岸きらめきラインは、宮崎県から南の方に宮崎市、日南市、串間市の3市にわたる国道220号線、222号線、448号線を主軸とした活動エリア。宮崎エリアでは、玄関口である宮崎駅の花修景、日南エリアも苗木成と花修景、串間エリアでは植栽活動を行っている。活動の目的は美しい道づくり、もてなしの道づくり、いやしの道づくりという3つのテーマを掲げている。

日南海岸沿いは国定公園に指定されている。近年の問題点は、海端の景色をよく見せたいが、ダンチクという竹がうっそうとしてきて海が見えなくなっている。そこで、予算を付けていただいて民間側で業者をお願いして一掃した。組織力の向上としては、日本風景街道大学宮崎本校を毎年1月に開催している。

きらめきラインのルート上には3つの道の駅がある。1つは道の駅フェニックス。海岸沿いのとても眺望のいいところにある。2つめは山間部に位置する道の駅酒谷、そして、道の駅なんごう。これも海沿いにある景観のいい道の駅。

道の駅フェニックスは、宮崎県を代表する観光地、日南海岸にある。指定管理者による運営管理を行っており、南国ムードを醸し出す植栽が行われている。

道の駅酒谷は、日南市から都城市を結ぶ幹線道路沿いにある。酒谷村おこし協議会で設立した特産品センターとしてスタートし、住民サービス部門における道の駅に認定された。地域の農作物や加工品の製造販売、地域の高齢者への弁当宅配サービス、地域景観の保全など地域活動も行っている。

道の駅なんごうは眼下に海が広がる風光明媚なところであり、指定管理者制度により管理運営を行っている。これまで、県の亜熱帯有用植物園と一体となった祭りなど、活動はまちづくりへも広がっていたが、今年、指定管理者が変わったことから連携の仕方を模索している。指定管理制度については、連携の継続についての課題を感じている。

道の駅との新たな連携として最近取り組みを始めたのが、サイクルツーリズムを通じたつながり「サイクルレスト よってね!」。南郷町の異業種交流会から始まり、きらめきラインの活動がパイプ役として広がっている。道の駅の指定管理者も異業種交流会のメンバーで、そこからの新たなつながりにより、自転車を通しての連携、さらに風景づくりという方向への期待も持っている。



◆論 点

- ・異なった主体をつなぐやり方や、知恵について。飯野市の場合は、道の駅と新幹線の駅の観光案内所の運営主体は一緒に、観光協会がやっている。観光客にとって楽しい情報を提供する、ということで共通している。シーニックバイウェイは、アクティビティをつなぐ役割を果たしている。地域の人への広報も行い、思いを共有しながら続けることが大切。
- ・サイクルツーリズムに取り組む中では、連携する先も少しずつ変わってきている。異業種交流会では商店主が多く、また、自転車ということでサイクリング協会との連携もある。それを結びつける役目を私たちがやるべきだと思っている。一方で、活動に関わる人たちが、改めて風景に目を向けることにつながることはうれしいこと。そのためにつなぐ役割もある。

◆座 長

道の駅と風景街道、あわせて地元の組織との連携についてそれぞれのルートからお話いただいた。その中で、風景街道の役割として、つなぐこと、そして情報を一元化することが大事だということを確認した。課題としては、指定管理者制度で道の駅などの管理者が変わった場合の新たな連携の模索なども挙げられた。



分科会総括

◆第1分科会 座長/山内 秀彦氏

第1分科会は、風景街道活動による地域振興「新たな生活景の創出」というテーマで、4人のパネラーの皆さんと討論した。その中のお2人が、静岡と北海道で、風景街道から端を発して、「互産互生」のビジネス交流をされているお話をされた。それから、婦恋村の熊川村長からは、日本ロマンチック街道と日本風景街道に関するお話。さらには、福井県の若狭の永江さんからは、日本遺産にも登録された鯖街道と若狭のお話をいただいた。

「互産互生」というお話の中では、静岡と北海道の人、モノ、ライフスタイルの交換という形を展開しながら、新しいコラボレーション商品をつくり出すといった活動の紹介があった。さらには、日本ロマンチック街道では、日光国立公園と、上信越の国立公園をつなぐ形で、330キロの距離を日本ロマンチック街道として取り組んでいながら、村長みずから各地の自治体の長を口説いてつながっていった話。そのつながりを活かした真田丸推進協議会をつくったことなど、人と人のつながりを活かして新しい仕掛けを講じた話があった。また、文化財を活かした活動として、若狭町の熊川宿のほうでは、様々な保存活動をしながらいろいろな登録がされてきたということを知った。

それぞれの地域で、風景街道の活動、地域の活動を育ててきた取り組みを、さらに磨き上げよう、そして地域の人に見える化をしようということが共通の思いだった。まず、地域に関わる住民や利用者の人たちがベースにあり、そこにデザイナーや建築家などプロの人たちが入ってサポートし、さらに、地域と地域をつなぐ婦恋村の熊川村長のようなバイタリティーのある「つなぐ人」、この3つがうまく機能していることが、それぞれの事例に共通しているところだと感じた。

こういった活動をさらに風景街道の中で磨き上げて、つながりを広げていくことが必要で、こういった活動の中でできあがった人や地域のつながりが、防災のまちづくりにも役立っていくことを確認した。日本風景街道のキーワードとなる「つながり」をもとに、活動を継続していくことの重要性を認識した。



◆第2分科会 座長/紺野 裕乃氏

第2分科会では、「風景街道活動を次世代に継承するために」というテーマで、北海道から十勝シーニックバイウエイの山崎さんに、小学生を対象として観光シーニックバイウエイを教えている事例をお聞きました。次に、大学生ファシリテータの日置さんから、ハイスクールサミットの話と、ご自身が関わった経緯を聞きながら、若い世代とどのように関わっていったらいいかというヒントをいただいた。最後に、宮崎の谷越さんから、大学との連携に関して、大学だけというよりは、大学と学生と一般企業など、いろいろな立場の人たちが一堂に会して、同じことを思い、活動を進めていくことの大切さを聞いた。

小学生に対しては、シーニックバイウエイの話を通して、地域を大事にする思いを知ってもらおうということから始まっているというお話。大学生、高校生に関しては、ハイスクールサミットの話の中で、高校生はどういう思いで活動に参加しているのかということを知り、彼らとの関わり方の大切さを改めて感じた。谷越さんの話からは、同じ思い、同じプロセスの中で勉強して学んでいくことの重要性を確認した。



◆第3分科会 座長/吉武 哲信氏

第3分科会は、日本風景街道と「道の駅」の連携による地域振興策をテーマに話し合った。まず、3人に話題提供をしていただいた。北海道大学の木村さんから、千曲川・花の里山風景街道のご報告をいただき、また、道の駅を拠点としたシーニックバイウエイの活動を、釧路・阿寒・摩周シーニックバイウエイの桐木さんより紹介いただいた。さらに、日南海岸きらきらラインの工藤さんから、「サイクルレスト よってね!」は道の駅とルートの新たな絆になるか、ということでも課題提供をいただいた。

木村さんの報告の中では、飯山の新幹線の駅ができて、飯山駅と道の駅がどのように連携しながら地域をめぐっていただくかということの工夫や、実際の動きについてご紹介いただいた。新幹線の駅の中に交流センター、アクティビティセンターを設け、値段が高めの自転車をレンタルし、ルートをまわっていただく活動の中で、シーニックの方たちがいろいろ企画をされて、新幹線の駅と道の駅をつなぐ役割を担っているという報告だった。

桐木さんからは、道の駅と風景街道が連携する具体的な動きとして、スタンプラリーを実施したこと、参加者もふえているという話があった。また、近年ふえている道の駅での車中泊の人たちへのヒアリング調査を行い、ニーズや課題を把握するとともに、調査に基づいた情報発信を行っていることなどが紹介された。

工藤さんからは、日南海岸きらきらラインの中の3つの道の駅とのパートナーシップによる活動について、課題も含めて紹介があった。サイクルツーリズムのボタリングツアーを対象に、「サイクルレスト よってね!」を設置したお話などを通して、それまでの風景街道と道の駅の連携から、さらに地域の異業種協議会といった商業者が新たな主体に加わってきており、サイクリング協会などとの連携も始まっているという報告がされた。ただ、課題として、今までまちづくりの拠点として活動してきた道の駅の指定管理者が変わり、新しい管理者となることで、それまでの活動の継続性が見えないことなどがあげられた。

問題としては、指定管理者の交代の話と、道の駅の相互の連携があったが、今回の3つのルートの取り組みについては、連携がうまくいっている事例が報告されたと思う。そういう意味で、異なる主体をつなぎ、目標を明確化して、協力して継承していくための要となる役割を風景街道が担うといったことを確認した。



◆総括 NPO法人ハッピーロードネット 渡邊 大輔

第1分科会から第3分科会、それぞれの報告をいただいた中で、「つながり」ということが共通のキーワードとしてあった。地域住民とのつながり、専門家、行政機関とのつながり、そして各拠点同士のつながり、世代間のつながり、さらに、風景街道同士のつながり。今回の日本風景街道大学ふくしま浜街道校においては、「つながり」という言葉に改めて視点を当てていくということで総括としたい。



分科会



12/9(金) 現地ワークショップ

コース 1：被災地視察と高校生との協働による名所づくり

楡葉町（ならはパーキングエリア）の視察をはじめ、富岡町（夜ノ森）、広野町（桜公園）などを訪れ、東日本大震災からの復興などについて、それぞれ説明を受けた。

コース 2：被災地視察と官民一体の復興まちづくり

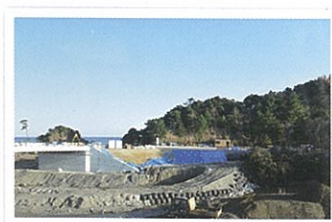
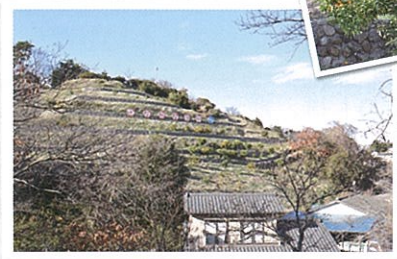
いわき市にある道の駅「よつくら港」、久之浜町の防災緑地などを訪れたほか、道の駅「ならは」の計画について説明を受け、官民が一体となった復興まちづくりを視察した。

■楡葉町（ならは PA）、富岡町（夜ノ森）



12/9(金) 現地ワークショップ

■ 広野町（桜公園・桜植樹 / 国道6号・道の駅ならは）、
勉強会（広野・富岡道路）、いわき市（道の駅よつくら港）



風景街道大学による福島復興に向けて（宣言文）

ふくしま浜街道ハッピーロード
NPO法人ハッピーロードネット 理事長

西本 由美子



「日本風景街道大学 ふくしま浜街道校」に、全国各地から大勢の皆さんにご参加頂きましてありがとうございました。

今回の「ふくしま浜街道校」では、各地の活動報告に加えて、被災地の状況や被災地の復興状況を視察していただき、被災地のありのままの姿を見て、触れて、感じて頂いたことと思います。

また、この被災地域が、いま、懸命に復興に向けて活動している状況をご覧いただけたのではないかと思います。

東北風景街道協議会に登録されている多くのルートは、歴史的に著名な街道を主として、風景街道の活動を進めているところが多いですが、「ふくしま浜街道ハッピーロード」は、現在の国道6号沿線を舞台に、福島浜通り地域の風景や自然、歴史、文化などの資源を活かした「美しい景観づくり」や「活力ある地域づくり」を目的に取り組んでいるところが特徴となっています。

私たちは、これまで、地域住民や地域の子供たちと一緒に植栽活動や清掃活動などに取り組んできました。震災後は、浜街道を桜並木で繋ぎ、『復興のシンボル』として全国・世界へ発信し、後世に残していくことを目的として「ふくしま浜街道・桜プロジェクト」を立ち上げて、全国の多くの方々からボランティアで参加していただき、桜の植樹を行っております。

また、人材育成においては、「子供たちが意見を言える場」を提供すること、「子供たちの提案が実現すること」を経験させることが大切であり、風景街道の活動の一環としては、地元高校生と他県の高校生とが共同で地域資源調査などを実施しています。

普段、地元の住民では気づかない地域資源も他地域の住民から見るとすばらしい資源であることが再認識されました。

私たちの活動は、最初は福島浜どおりの一部地域の植栽活動から始まったものでしたが、地域の高校生や中学生が参加し、さらには子供たちの提案から、福島浜どおり全域へと活動エリアや活動内容が広がってきました。

また、創設期のメンバーは大人が数名でしたが、しだいに地域の住民の方々に参加していただき、当時は高校生だった子供たちが大きくなり、今ではボランティア活動の中心となって活躍しています。

風景街道活動を次世代に継承するために、どの団体においても、メンバーの固定化やメンバーの高齢化が、大きな課題となっております。

これまでのように、リーダーが地域を引っ張るだけでなく、地域住民ひとりひとりが、それぞれの得意な分野で力を発揮しあい、協力しあいながら、地域を担っていくことが重要であり、多くの方々気軽に参加できるしくみをつくっていく、工夫していくことが大切ではないかと考えております。

「地域づくり」は、地元を愛し、住んでいる方々が自信と誇りを持って生活していく環境をつくることだと思います。

私たちは、これからも福島復興に向けて誇りをもって活動を進めてまいります。

私たちには、残したい風景があります。私たちが、みんなの夢を乗せた風景を作り出していきます。

震災にも放射能にも決して負けない「ふくしま」の心意気を感じて頂いたことと思います。

皆さん、地元にお帰りになったら、ぜひ、福島現状をお伝えください。

最後に、日本風景街道の皆様全国各地での御活躍を祈念し、また福島復興に向けて、ますます頑張ることをここに宣言し、ご挨拶とさせていただきます。



次回開催地市長挨拶

石川県珠洲市 市長 泉谷 満寿裕 氏



石川県珠洲市は能登半島の先端にあり、国連の世界農業遺産に認定された豊かな美しい里山、里海に恵まれている。祭りや特徴のある伝統文化が今なお息づき、おいしい食がたくさんあり、人もいいところである。

昨年3月に北陸新幹線が金沢まで開業したことに加え、NHKの朝ドラ『まれ』の舞台にもなり、珠洲市の風景や塩田が大きくクローズアップされた。そのようなことで、観光客の入り込みが大幅にふえている。昨年は132万人の方々にお越しいただいた。海岸線の海の道あり、山の道あり、そしてまた、観光スポットが点在し、まさにシーニックバイウェイそのものではないかと思っている。

来年の9月には、珠洲市で北能登国際芸術祭を開催する。その直後辺りに日本風景街道大学を開催できればと考えている。ぜひ多くの皆さんにお越しいただけるようお願いを申し上げ、次回開催地の挨拶としたい。



道路協力団体制度に関する説明会

■ 説明者

国土交通省道路局 道路環境調査室 室長 高松 諭 氏



平成28年の道路法改正により、新たに創設された制度である「道路協力団体制度」について、高松室長より、その概要などが説明された。

民間団体との連携による道路の管理の一層の充実を図るのが目的で、活動を適切かつ確実に行うことができると認められる法人等が対象。一連の活動を通じて、道路空間の魅力を高め、地域の賑わいの創出や地域活性化につなげていこうというもの。道路空間の修景などの公的活動や、レンタサイクル、オープンカフェなどの収益活動、道路の管理に関する調査研究といった多岐にわたる活動をイメージしている。

なお、詳細については、国土交通省並びに日本風景街道コミュニティのホームページ等に掲載予定。制度の積極的な活用を呼びかけている。

